

40
TH

TOWN of PHOTOGRAPHY ANNIVERSARY BOOK

東川町「写真の町」40周年誌



ちいさな町の、おおきな歩み





東川町「写真の町」40周年誌

写真の町宣言

「自然」と「人」、「人」と「文化」、「人」と「人」
それぞれの出会いの中に感動が生まれます。

そのとき、それぞれの^{はざま}間に風のようにカメラがあるなら、人は、その出会いを永遠に手中にし、幾多くの人々に感動を与え、分かちあうことができるのです。そして、「出会い」と「写真」が結実するとき、人間を謳い、自然を讃える感動の物語がはじまり、誰もが、言葉を超越した詩人やコミュニケーションの名手に生まれかわるのです。

東川町に住むわたくしたちは、その素晴らしい感動をかたちづくるために四季折々に別世界を創造し植物や動物たちが息づく、雄大な自然環境と、風光明媚な景観を未来永劫に保ち、先人たちから受け継ぎ、共に培った、美しい風土と、豊かな心をさらに育み、この恵まれた大地に、世界の人々に開かれた町、心のこもった“写真映りのよい”町の創造をめざします。そして、今、ここに、世界に向け、東川町「写真の町」誕生を宣言します。

1985年6月1日 北海道上川郡東川町

はじめに

東川町は2025年6月1日、「写真の町宣言」から40年という節目の年を迎えました。この40年間、東川町は「写真の町」を通じて多くの人々と繋がり、共に歩んできました。

東川町国際写真フェスティバルからスタートした「写真の町」のさまざまな取り組みは、単なる文化活動に留まらず、この町のまちづくりの意識として深く根を下ろしています。

小さなこの町の、日々の小さな一步の積み重ねは、40年という歳月をかけて、振り返ると大きな道となっていました。現在私たちが見ている景色は、長い時間をかけて築き上げてきた、先人たちのたくさんの想いの積み重ねの上にあるのです。

この本は、そんな「写真の町」の想いや歩みを振り返り、あらためて「写真の町」の価値を見つめ直す記念冊子です。本冊子が、少しでも「写真の町」を知る道標となれば。そして、未来へと続く新たな一步を共に踏み出すための手助けとなることを願っています。



写真の町宣言 2
はじめに 3

CHAPTER
一
「写真の町」をたどる 5

たどる①～③／写真の町の年表

CHAPTER
二
「写真の町」と出会う 15

写真に出会う、1年間／東川町国際写真フェスティバル／
全国高等学校写真選手権大会／高校生国際交流写真フェスティバル

CHAPTER
三
「写真の町」を支える 31

町民目線で「写真の町」をつくる「企画委員」座談会／
企画委員がつくる「写真の町」のイベント

CHAPTER
四
「写真の町」を重ねる 37

写真の町 東川賞受賞者・審査会委員一覧／
写真甲子園本戦結果一覧／ユースフェス選抜校一覧

COLUMN

この人がいなければ、「写真の町」は始まらなかつた 14
賞名にも名を残す、70年間東川を撮り続けた役場職員 28
魅力まだまだ！写真を楽しむ東川 36



「写真の町」をたどる

「写真の町」東川町。
：というものの、実際に
その歴史を知る人は多くない。
東川町にとつての根っこは、
どう形づくられてきたのか。
幕開けからこれまでの
歩みを振り返る。



「写真の町」の夜明け

他にはない独自のまちづくり、
「写真の町」東川町の歩みをたどる。

観光に悩む「行き止まり」の地

「写真の町」のはじまりは、198

4年まで遡ります。この年開拓90年、

10年後には開拓100年を控える

東川町は、「次の時代の東川町」に

向けた新たなまちづくりの方向性を

模索していました。全国的に「一村

一品運動」が広まり、地方自治体は

それぞれの資源を活かしたまちおこ

しに取り組む流れもあった時期です。

当時の東川町は「お米と工芸、観光

の町」をキヤッチフレーズにまちづ

くりを進めていましたが、特に観光

においては、天人峡・旭岳の2つの

温泉地を有しながらも、富良野・旭

川・層雲峡といったメジャーな観光

ルートから外れ、観光客を集めづら

い状況でした。観光客を誘致するた

めに様々なイベントを企画していま

したが、それらの取り組みは一時的

迫る100年と一村一品運動

この状況を開拓するため、両温

泉地区では新たなイベント企画を検討していましたが、天人峡温泉地区の

PRなどを請け負っていた旭川の印

刷会社社長の宗万忠氏が、札幌のイベ

ント企画会社であるゼブラ・プラ

ネット(当時は「勇崎企画」)代表の勇

崎哲史氏に相談。すると勇崎氏から

は、従来の単発的なイベントによる

集客策ではなく、東川の自然景観を

活かした町全体が発信力をもつ「写

真の町」づくりというコンセプトの

企画が提案されました。この提案は、

「写真」を通じて町の風景や文化の

魅力を広く発信し、町内の至るところ

な効果にとどまることが多い、長期的な視点で町の魅力を発信するための戦略が求められていた時期でした。



で写真に触れる機会を設け、人々が町に何度も訪れる理由や魅力を創出することを目指したものでした。両温泉地区は、想定外のあまりにも壮大な提案であったことから、温泉街で実現するというよりも、町全体

として取り組むことができないか町役場に企画を持ち込みます。

当時町長だった中川音治氏は、10年後に控えた開拓100年に向けて思案しており、さらに「一村一品運動の中で「米」「木工・家具」「観光」



などの要素で、どう他の自治体との差別化を図り知名度を上げていくかを検討していたタイミング。観光地と町の将来について、様々な思いを巡らせていた時期でした。提案から2カ月間検討したのち、1984年の末に「写真の町」実施の判断を下します。このようにして「写真の町」の構想は形を成し、翌年1985年6月1日に東川町は正式に「写真の町」を宣言しました。

町民たちが抱いた疎外感

こうしてスタートした「写真の町」でしたが、すぐに町民に受け入れられたわけではありませんでした。特に最初の10年間は苦難の連続。「写真映りのよい町」として町と写真の運動を謳いましたが、季節ごとの田園風景の移り変わりは町に住む

人にとってごく「当たり前」の日常。「写真」で残していくことに、町民自身が大きな価値を感じることができなかったのです。

さらに「写真の町」としてスター

トしたイベントや写真展の参加者の中に直接参加する機会は数少なく、「写真の町」は行政の特別事業のように受け止められ、町で暮らす人たちの中で疎外感を抱く人も少なくなかつたそうです。東川町国際写真フェス

ティバル、通称「東川町フォトフェス」では、当時から著名な写真家が作品を展示し、専門的な講評が行われましたが、その価値は理解されにくるものでした。多くの町民たちが「写真の町」を掲げる意義を見出せないまま、月日は過ぎていきます。

変化していく町民の意識

開始当初は受け入れられなかったフォトフェスタも、多くの工夫によって町民理解が深まっていく。

町民参加と地域の一体化

理解がなかなか得られないまま「写真の町」がスタートして6年、1991年に就任した町長、山田孝夫氏の下で町内全戸を対象に行われたまちづくりアンケートをきっかけに、写真の町に変化が起こりはじめます。このアンケートでは、「写真の町」を継続すべきかどうかについての町民意識も調査。写真の町を「そのまま続けるべき」との意見はわずか8・6%だったものの、「町民参加で進めるべき」との回答は41・5%で、2つを合計すると過半数超え（やめるべき）は32%）。「写真の町」の取り組みについての多少の疑問は持っているものの、ここでやめてしまふことは長期的に町にとって良くない判断だと、町民が感じていたからこそその結果でした。このアンケート

結果を受け、町では写真文化を地域に根付かせる施策を強化していく方向に舵を切ることに。これまでイベントを重視した「東川町国際写真フェスティバル実行委員会」を「東川町写真の町実行委員会」に改組し、その実行組織として一般町民で構成する「写真の町企画委員会」を立ち上げ、「どうやって町民を巻き込めるか」について一生懸命考えを巡らせます。町内商店で写真を飾る企画や小学生が取り組む「写真絵日記」、シニア層向けの写真展など、幅広い世代へ企画を実施。また、これまで別日程で開催していた「商工夏祭り」と「フォトフェスタ」を一体化させ「どんとこい祭り」として同時に開催も。役場の電話応対では最初の挨拶に「写真の町、東川町です」と名乗る取り組みもはじまり、あらゆる場面で「写真」を感じさせる工夫

がなされました。

写真甲子園で変化した意識

写真の町宣言から10年後、さらなる転機が訪れます。1994年、全国高等学校写真選手権大会、通称「写真甲子園」がスタートします。全国の高校生が集まり、写真を通じて技術を競うこの大会は、町民参加型の取り組みの象徴となっていました。写真甲子園の開催によって町民が大会運営や被写体として深く関わるようになり、さらに高校生の町内ホームステイが始まることなども合わさり、外部の若者たちとの交流が生まれます。町民の「写真の町」への理解と関心の高まりは、現在に続く東川町民の「人を心地よく迎え入れる」という意識の土壤づくりにも繋がっていきます。

文化ギャラリー建設以前は、作品をパネル展示



東川町文化ギャラリーの設立は1989年のため、フォトフェスタがスタートした当初は写真作家の作品をパーテーションなどに展示していました。専門的な施設がないなかでの開始となつたため、当時は勇崎氏が主導しながら、町内施設や温泉街の宿も活用し、様々なことを手探りで企画・実施していました。

写真家と町民が一緒に楽しむ様々な催し

フォトフェスタ開始当初の企画として、「仮装大会」がありました。町民が思い思いに変装した姿を、東川賞の審査会委員や受賞者たちが写真を撮りながら審査するというユニークなもの。その他、開拓100周年には「音楽祭」が同時開催されるなど、「写真の町」を東川に溶け込ますため、多くの連携企画が実施されてきました。



『北の国から』の倉本聰氏と町内作家の竹田津実氏が対談



1987年の第3回の開催時には、特別対談を開催。富良野を舞台にしたテレビドラマ『北の国から』の原作・脚本を手掛けた、脚本家の倉本聰氏と、町内の写真家で後に写真甲子園の審査委員も務め、現在に至るまで「写真の町」に尽力している竹田津実氏によるトークイベントが賑わいを見せました。

現在地から見える足跡と風景

20年かけて浸透し、次の20年で進化を遂げる。
未来の20年に向け、私たちが進むべき道は?

産業連携で 「町」が誇る取り組みに

さらに、2000年以降の松岡市郎氏が町長を務めた時代には、より積極的な「写真の町」事業が波及。写真映りのよいまちづくりと自然景観の保全を両面から進めるため、「美しい東川の風景を守り育てる条例」を制定。景観計画に基づく団地造成やオリジナルの婚姻届や出生届をスタートさせるなど、写真と住民生活を結び付けたまちづくりに取り組みます。また、農業、商工業、観光業がスクラムを組みながら産業連携し、「写真の町」を経済に落とし込むことが松岡氏の町長としての公式でもあつたため、写真を題材にしたプロモーションや商品開発が次々と進められます。「写真×農業」による米缶の開発や、「写真×商業」に

「観光」として写真を撮りながら東川の飲食店やクラフト工房、温泉を巡る豪華景品があたる「みちくさドライブライブラリー」などの企画もスタート。「写真の町」をベースにしながら、農業、商工業、観光業と連携するためには、ユニークな取り組みが次々と実施されました。

町の意識を変えた企画会社の倒産

「写真の町」スタートから20年が経ち、ようやく町に定着してきた頃、大きな出来事が起ります。それが、勇崎氏が代表を務めるゼブラ・プラスの倒産です。2005年5月、写真甲子園やフォトフェスタの開催が3ヵ月後に迫るタイミングでした。当時は企画・運営をゼブラ・プラスが一手に引き受けっていたこともあり、役場内は騒然。しかし引き下



KEYWORD

「写真の町」の考え方には、町の基本原則を定める「まちづくり条例(※)」にも組み込まれた。条例は2015年に制定され、時の町長の意向などにより変わらないように位置付けられている。

まちづくりの基本原則にも
「写真の町」は明記

がることもできない状況で、担当職員たちも、「やめるわけにはいかない」と腹を括り、町が主体となり準備・開催が進みました。追い込まれた状況で「何がなんでもやりきる」という意識が、結果的に職員のノウ

(※) 写真文化首都「写真の町」東川町まちづくり基本条例

長く続けていくために、 功労者への感謝を忘れずに



KEYWORD

ハウを高めたと関係者は当時を振り返ります。ここで、20年培ってきた「写真の町」の協力企業や団体関係者、何よりも町民との関係性が大きく活きることになります。危機的状況の中で、

40年の中で、開始当初から「写真の町」を語られる人物は徐々に少なくなってきた。第40回フォトフェスタでは、第1回から関わる功労者の代表として、浜辺啓氏に町から感謝状を渡した。

小さな歩幅で築いた大きな道
その後も、「写真の町」として多くの取り組みが実施されていきます。「オリジナル婚姻届・出生届」や、

40年を乗り越え、多くのイベントのアイデアを出し、自分たちで企画、運営した結果とも言えるでしょう。過去に「たとえば」はありませんが、今でも「写真の町」の事業をどこかの会社に委託していたとしたら、東川町はここまで注目される町になつていなかつたかもしれません。

「ひがしかわ株主制度（ふるさと納税）」など、今にも続く「東川らしさ」といわれる取り組みの多くは、人、自然、文化を大切にすることをはなく、町の「独自運営」に踏み切ります。今、東川町が大小様々なイベントを実施できるのは、この経験を「創生的成功例」として取り上げられることも増えた東川町ですが、その根っこをたどると、実は「写真の町」にたどり着くことが多いのです。この40年、関係者や町の一人ひとりが「町民の生活を豊かにするためには、何が最善か?」という選択を続けてきました。小さな一步一歩の積み重ねが大きな道となり、私たちはそこに立っています。そこで受け取ったものを、未来に繋げる必要があるはず。次世代のために「次の一步」を創るのは、この町で暮らす私たち自身なのです。

- 1984年** 10月 | ゼブラ・プラネット（当時は「株式会社勇崎企画」）の写真家 勇崎哲史氏が「写真の町」の企画について町に提案
末 | 中川音治町長が「写真の町」を採用
- 1985年** 3月8日 | 中川町長が定例町議会の政策方針で「写真の町」に言及
4月25日 | 東川町国際写真フェスティバル実行委員会を設立
6月1日 | 写真の町宣言
8月24日 | 第1回 東川町国際写真フェスティバル、東川賞授賞式開催
(フォトフェスタは9月30日までの約1ヵ月間開催)
- 1986年** 3月24日 | 「写真の町に関する条例」を制定
| 「写真アンデパンダン展」を初開催
- 1988年** | ポランティア「フォトフェスタふれんず（通称：フォトふれ）」スタート
- 1989年** 11月3日 | 東川町文化ギャラリー開館
| 東川第二小学校で体験学習として「写真」の授業をスタート
- 1991年** 2月末 | 東川町長選にて、山田孝夫町長が当選
5月 | 「写真の町」が日本写真協会賞の功労賞を受賞
6月 | 町内全戸を対象にしたアンケートを実施。
「写真の町」に対しての町民意識も調査
8月 | どんとこい祭りと東川賞授賞式を同日に開催
8月 | 東川町新まちづくり計画策定委員会（通称「まちづくり百人委員会」）を組織
- 1992年** 9月 | まちづくり百人委員会より「写真の町」がリーディングプロジェクトとして位置付けられる
| 92年度まで観光事業が好調で、年間の観光客が100万人を超える
- 1993年** 5月 | 山田町長が記者会見にて写真の町を「東川町の最上位プロジェクト」として発表
| 東川町国際写真フェスティバル実行委員会を解散。
写真の町実行委員会を組織。
委員会の内部に「町づくり」「文化」「産業経済」3つの部会を設置
- 1994年** | 開拓100年、写真の町宣言から10年目
| 全国高等学校写真選手権大会（写真甲子園）がスタート
| 記念写真集『光画録』を町内全戸に配布
5月 | 東川高校に写真部が誕生
- 1999年** 10月 | 写真の町15周年記念でジャーナリスト筑紫哲也氏の講演会を開催
12月 | 東川町が第25回日本写真協会賞受賞。自治体として初の受賞
- 2000年** 1月 | 東川町写真の町実行委員会に北海道が地域文化選奨 特別賞を授与
1月 | 町の人口が7500人を突破
- 2001年** 1月5日 | インフォメーションセンター「道草館」開館
| ひがしかわ写真の町俱楽部を設立。2009年まで活動
- 2002年** | 「美しい東川の風景を守り育てる条例」を制定
- 2003年** 2月 | 東川町長選にて、松岡市郎氏が当選
7月 | 写真甲子園の同窓会を設立
- 2004年** 8月 | 「写真アンデパンダン展」を「写真インディペンデンス展」に改称
9月 | 大雪旭岳源水公園がオープン
- 2005年** 5月 | 「道草館」の道の駅登録を記念して、みちくさドライブライ初開催
5月 | ゼブラ・プラネット株式会社が倒産。企画運営を町が担う契機に

- 写真甲子園の使用機材を変更。フィルムカメラからデジタルカメラへ
- 10月 | オリジナル婚姻届・出生届をスタート
- 2006年 | 景観法に基づく景観計画を策定
- 8月 | 君の椅子、初めての贈呈式
- 8月 | 現在に続くフォトフェスタの恒例企画、「思い出写真館 NIJI (にじ)」と東川ストリートギャラリーを初開催
- 2008年 | 町役場の大きな機構改革「写真の町課」を設立
- 8月 | 写真甲子園の出場校のホームステイを初実施
- 9月 | 「写真の町」ひがしかわ株主制度(ふるさと納税)がスタート
- 12月 | 町の写真家、飛彈野数右衛門氏が逝去
- 2009年 | 一般財団法人地域活性化センターの第13回ふるさとイベント大賞で写真甲子園が優秀賞を受賞
- 文化庁長官表彰(文化芸術創造都市部門)に東川町が選出
- 2010年 | 4月 東川中学校の全生徒に名前入りの「学びの椅子」を卒業時に贈呈する事業スタート
- 7月 東川賞を「写真の町 東川賞」に改称。飛彈野数右衛門賞設立。賞金も見直された
- 2011年 | 4月 「写真の町」担当の学芸員を正規採用
- 2012年 | 5月 「東川米」が道産米で初の地域団体商標登録
- 2013年 | 5月 写真の町 ひがしかわ写真少年団発足
- 2014年 | 3月 写真文化首都宣言を発表
- 7月 写真文化首都「写真の町」東川町まちづくり基本条例を制定
- 東川アーティストインレジデンスがスタート
- 2015年 | 8月 第1回高校生国際交流写真フェスティバル(ユースフェス)開催
- 12月 町の人口が8000人を突破
- 2016年 | 3月 近年の東川のまちづくりを記した『東川スタイル』(産学社)発行
- 2017年 | 11月 映画『写真甲子園 0.5秒の夏』が全国で公開
- 2019年 | 展示企画「東川賞歴代受賞作家屋外写真展」「GAKKOTEN」がスタート
- 東川オフィシャルパートナー制度を開始
- 2020年 | コロナ禍で多くの町の事業が実施できず
- 2021年 | 3月30日 東川町文化ギャラリーがリニューアルオープン
- 7月 勇崎哲史氏が逝去
- 2023年 | 2月 東川町長選にて、菊地伸氏が当選
- 写真甲子園が30回目を迎える。30年間審査委員長を務めた立木義浩氏が退任。代表審査委員として野村恵子氏が就任
- 2024年 | 6月 東川に住む18名の写真家による写真展「東川×写真×私」開催
- 東川町国際写真フェスティバルが40回目を迎える
- 東川町が開拓130年を迎える。大黒摩季氏のコンサートを開催
- 2025年 | 6月 6月1日「写真の日」で、「写真の町」が40周年を迎える

年表制作：2025年3月31日 取材協力：高橋 朗 (PGIギャラリーディレクター)

参考資料：『東川町史 第三巻』(写真文化首都「写真の町」東川町、2022年)

本章は、東川町役場への取材をもとに制作しました

この人がいなければ、 「写真の町」は始まらなかつた

写真家・写真文化研究者 **勇崎哲史**

北海道に生まれ、東川町に「写真の町」を立ち上げ尽力した勇崎哲史氏は、沖縄に強く惹かれ、活動した写真家でもありました。

1971年、撮影アシスタントとして沖縄を訪れた際に、その豊かな文化や、優しさを失わない人々に触れます。その後、沖縄全域を放浪し、沖縄の人々の日常の姿を撮影。ここでの交流や出会いから得た気付きが、フォトフェスタの構想をはじめ、全ての仕事の源となりました。

一旦は写真家の道を断念し、1977年に札幌に戻り企画会社を兄弟で営むことに。その会社の代表として「写真の町」を東川に提案、事業

をスタート。1989年、フォトフェスタで憧れの写真家、ロバート・フランクに出会い、作家活動の再開を決意し、再度沖縄に通い始めます。

勇崎氏の写真への情熱は、フォトフェスタから離れた後も途絶えることはなく、2007年沖縄への移住後は、北海道でのプランニングの経験や独自の写真研究を基に、「光画

文化研究所」を設立。写真表現を志す人々を分け隔てなくサポートし、その感性を育てる活動に注力します。2021年に逝去するまで、写真の持つ無限の可能性を信じ続けた勇崎氏。「写真の町」のきっかけを与えてくれた重要な人物なのです。



©石川竜一

ゆうざきてつし／写真家・写真文化研究者
1949年、札幌市生まれ。1984年に東川町に「写真の町構想」「写真の町宣言」を企画・提案し、翌85年から21年間にわたり、日本初の国際写真フェスティバル「東川町フォトフェスタ」と、国際写真賞「東川賞」のプロデューサー、プランナー、キュレーターとして、立案と制作実施に携わる。1994年より札幌市写真ライブラリーの多数の企画展を制作するとともに、20万タイトルに及ぶ札幌市関連写真のネガ収蔵とデジタル・アーカイブ化の起案と制作に携わる。2007年、那覇市に移住。光画文化研究所を開設。沖縄を中心で写真を通した「人育て」や写真文化を広げる活動をしながら作品制作を行った。2021年、逝去。



「写真の町」と 出会う

私たちは「写真の町」で
どんな体験ができ、
何と出会えるのだろう。
夏の三大イベントを中心に
1年間の展示やイベント、
それぞれの内容を知る。



写真に出会う、1年間

通年

東川賞コレクション展

2024年度までに、170名の作家の約3200作品を町の資産として保有している東川町。その作品たちは、一年を通じて、文化ギャラリーで企画展に連動しつつ展示されています。また、全ての収蔵作品は「東川賞受賞作家収蔵作品データベース」にてWeb上で閲覧が可能。



3つの写真イベント

東川町を代表する、夏の三大写真イベント

写真甲子園

8月下旬

7月末～8月

△P22

フォトフェスタ

△P18

ユースフェス

△P26

4月

ひがしかわ大写真展

毎年4月の恒例企画となっている、東川町が主役のフォトコンテストによる写真展。町内で撮影された写真であれば誰でも応募でき、審査も町内在住の有志のカメラマンなどが行います。「一般部門」と「子ども部門」があり、各部門に「人物コース」と「風景コース」を設置。応募の全作品が、文化ギャラリーで展示されます。



文化ギャラリーの企画展

通年

文化ギャラリーを運営する東川町役場「写真の町課」が自主企画する展示は、年に3本程度開催。注目の若手作家や、著名写真家の写真展までジャンルは幅広く、町民の親しみやすさを意識しながら企画が練られています。写真家をゲストに招いたトークイベントも展示ごとに開催されるので、気になる展示はぜひ参加してみてください。

「写真の町」の活動や展示は「写真の町課」が中心となり、一年を通して行われています。写真展の他、10月の「東川町民総合文化祭」のように、陶芸や俳句、盆栽などの発表が行われ、町民が文化ギャラリーを活用する機会も作られています。

- 1月 林忠彦賞受賞記念写真展

2月 写真少年団 活動発表展

3月 北海道報道写真展
高文連日韓中高校生
フォトコンテスト写真展

4月 ひがしかわ大写真展

5月 企画展①

6月 企画展②

7月 公募展①②

8月 東川賞 受賞作家作品展

9月 写真甲子園 本戦作品展
高校生国際交流写真
フェスティバル作品展
北海道高等学校文化連盟
上川支部展
企画展③

10月 東川町民総合文化祭

11月 東京写真月間巡回展

12月 東川小学校 写真ワークショップ展
キヤノンギャラリー巡回展



※上記のスケジュールはあくまでイメージで、展示内容や展示期間、展覧会の数は毎年変動します。また、文化ギャラリーには4つ展示室があり、同時開催で様々な展示が行われています。

文化ギャラリーのある1年間の主な展示

通年

写真賞等の巡回展



全国で開催された写真展が「巡回展」として東川町で催され、注目の展示を見られる機会にもなっています。林忠彦賞受賞記念写真展や、キヤノンギャラリーの巡回展、東京写真月間の作品展など、毎年恒例の展示もあれば、その年だけのものも。

2月・12月

写真少年団と 東川小学校の展示



年3回程

公募履

文化ギャラリーでの展示はほとんどが巡回展や企画展ですが、企画を一般の方々から募る「公募展」も。ひとつ企画につき2週間程度の期間で、年に2回程開催されます。募集は通常で実施しており、毎年秋から冬の時期に行い、翌年の展示を決定しています。

東川町国際写真フェスティバル

通称 東川町フォトフェスタ



40回を迎えた「写真の町」の原点

東川町国際写真フェスティバルは、1985年にスタートした「写真の町」の原点とも言えるイベントです。毎年7月末頃からはじまるメイン会期を皮切りに、約1カ月間開催。イベントの中心となる企画は「写真の町 東川賞」で、その授賞式や受賞作家作品展、フォーラムが開かれ、毎年全国から多くの写真関係者が集います。文化ギャラリーで作品展示をする公募展や、写真のプロに写真を評価してもらう「ポートフォリオレビュー」といった若手作家のための企画から、屋外写真展や写真学校の生徒の作品展、写真教室やストリートギャラリーなど初心者・町民も参加できる写真展も多数開催され、幅広い層に向けた企画が用意されています。メイン会期には「どんとこい祭り」も同時開催され、町が最も賑わう夏の一大イベントとなります。

著名写真家が名を連ねる「写真の町 東川賞」



自治体運営としては、最も古く、長い歴史を誇る写真賞である写真の町 東川賞。受賞条件には「東川町で開催される授賞式への参加」があるため、作家が実際に東川町を体験することも特徴です。歴代受賞者は、篠山紀信（第2回）、荒木経惟（第7回）、杉本博司（第11回）など著名作家の名前も並びます。

歴代受賞作家たちの「屋外写真展」

過去の受賞者の作品が毎年のテーマごとに選出され、東川町役場、東川町郷土館、農村環境改善センターなどに大きく印刷されて、長期間展示されます。町じゅうに写真が溢れる風景は写真の町の風物詩。2024年の第40回は、町を振り返る意味を込めて東川町を撮り続けた飛彈野数右衛門の作品で構成されました。



多種多様な写真イベント



東川町文化ギャラリーを中心には、プロアマ問わず多様な企画・イベントが町内にて開催されます。受賞者と審査会委員が作品や選出理由などについて語る、目玉企画のフォーラムは、ギャラリーが写真好きで溢れ返る風景が印象的。豪華カメラ機材が景品となるフォトコンテスト（ストリートギャラリー）も実施されます。

「写真の町 東川賞」 数字で知る

「写真の町 東川賞」は、日本で初めて自治体が制定した写真賞です。「写真文化への貢献と育成、東川町民の文化意識の醸成と高揚」を目的とし、1985年から毎年、優れた写真作品や写真作家に賞と賞金を贈っています。

東川賞の他に、自治体が主導する写真賞としては、神奈川県相模原市が運営する、総合写真祭「フォトシティさがみはら」(2001年第1回開催)があり、地域の写真活動団体が集う「写真文化推進協議会」という枠組みの中で情報や意見交換等をしながら、互いの発展を目指しています。

初

400

約400名のノミネーター
2月審査開始、5月に発表

東川賞の審査は、東川町長から依頼を受けたノミネーター約400名による推薦をもとに、東川町長が委嘱する8名の審査会委員が担当します。

毎年2月以降、ノミネートされた全ての作家についてリサーチをかけます。

国内作家賞と新人作家賞については、過去3年間の全ての発表作品情報を収集し、特別作家賞と飛彈野数右衛門賞は生涯を通じた作品の情報を事務局が収集。その資料をもとに、審査会が開かれます。

海外作家賞は、町が委嘱したキュレーターがその年の地域をリサーチし、候補作家を提案する形で審査が進み、受賞作家は毎年5月1日に発表されます。

推薦式
8名は
審査会委員

350

賞金総額350万円

受賞作家に贈られる賞金。作家一人に対して最高100万円という賞金は、国内の写真賞としては高額で、作家を支援する取り組みとしても貴重な賞であるといえます。

〈海外作家賞〉1名 賞金 100万円
〈国内作家賞〉1名 賞金 100万円
〈新人作家賞〉1名 賞金 50万円
〈特別作家賞〉1名 賞金 50万円
〈飛彈野数右衛門賞〉1名 賞金 50万円

海外作家賞は、世界をいくつかの地域に分け、毎年異なる地域を対象としています。その地域に国籍を持つ、または出生地や居住地としている作家が対象です。

発表年度は問いません。

国内作家賞と新人作家賞は、過去3年間に発表された作品のうち、写真史や写真表現の上で未来に価値を残した作家を対象とします。新人作家賞については、写真歴や年齢などの規定はなく、審査員の中で総合的に判断されています。

特別作家賞は、北海道出身または在住の作家、もしくは北海道をテーマにした作品の作家が対象です。

飛彈野数右衛門賞は、地域の人々、自然、文化を長年にわたり撮り続け、地域社会に貢献したと認められる作家が対象です。

5

5つの賞と選考基準

海外作家賞は、世界をいくつかの地域に分け、毎年異なる地域を対象としています。その地域に国籍を持つ、または出生地や居住地としている作家が対象です。

発表年度は問いません。

国内作家賞と新人作家賞は、過去3年間に発表された作品のうち、写真史や写真表現の上で未来に価値を残した作家を対象とします。新人作家賞については、写真歴や年齢などの規定はなく、審査員の中で総合的に判断されています。

特別作家賞は、北海道出身または在住の作家、もしくは北海道をテーマにした作品の作家が対象です。

飛彈野数右衛門賞は、地域の人々、自然、文化を長年にわたり撮り続け、地域社会に貢献したと認められる作家が対象です。

170名3200作品を、
町の資産として保有

受賞者は対象作品の一部を、オリジナル・プリントとして東川町民に寄贈します。東川町文化ギャラリーにて保管・展示し、写真文化の普及と友好の促進に努めます。2024年度の40回までで、合計170名、約3200作品を収蔵しており、貴重な町の資産となっています。

170 3200

8

東川賞の8名の審査会委員は、任期を1期5年、最大10年とし、現在の委員が「推薦」する形で次の審査会委員を任命します。町役場からは委員を提案・推薦はできず、作家の純粋な表現活動に対する評価を保つ仕組みとなっています。

東川町写真の町実行委員会

東川町写真の町実行委員会は、「写真の町 東川賞」「フォトフェスタ」「写真甲子園」をはじめ、東川町のまちづくり全般を運営していくために組織された団体です。農協、商工会、観光協会といった町の主要組織の代表者をはじめ、校長会やスポーツ協会、町内自治振興会、警察官駐在所も含めて、「町」の運営に関わる団体がほぼ全て集うことにより、「写真の町」としての運営方針を決定づける組織とも言えます。毎年4月に総会が行われ、その一年の「写真の町」としての方針を決めていきます。東川町役場の「写真の町課」は、この委員会の事務局として機能しています。



東川町写真の町実行委員会の実動組織として、町内の有志による「企画委員会」がつくられています。企画委員会の中で決議された企画・提案内容をもとに、決定機関である実行委員会に提案し、総会で一年の写真の町の方針が決まります。町民の有志が意見しあったことが、「まちづくり」における大きな意義を持つという意味で、企画委員は非常に重要な役割を担っているとも言えます。

(企画委員の座談会記事はP32へ)

フォトふれ



全国から広く募集し、18歳以上なら誰でも応募ができる「フォトフェスタふれんず」の通称。写真学校の生徒など若者を中心、毎年15名程度が集まります。展示会場の設営、イベントサポートなどに関わるボランティアチームで、第4回のフォトフェスタから続いており、今や欠かすことのできない存在。フォトふれでは初期から町内ホームステイを実施しており、写真甲子園スタート以前から町民と外から来る若者の橋渡し的な役割も担っていました。実際の展示作業を通して本格的な写真展示のスキルを2週間かけて学ぶことができ、フォトふれ卒業生には、キュレーターや写真家など写真業界の第一線で活躍する方々も。

全国高等学校写真選手権大会

通称 写真甲子園



「写真の町」が町民に馴染んだきっかけ

1994年にフォトフェスタ10年目を記念しはじまつた、高校写真部のための全国大会。全国の高校写真部・サークルなどから、共同制作による組写真の作品を募集し、全国約600校の中から、初戦審査会（プリント審査）及びブロック審査会（プレゼンテーション審査）を経て、全国11ブロックから代表18校を選抜します。2024年度は歴代最多の604校が応募。東川町で開催される本戦大会は4日間で、全校にキヤノンの同一カメラ、レンズを貸し出し、「同一条件」のもとで撮影技術や表現力を競うのが大きな特徴です。また期間中、町内団体による食事提供や、町民の家に宿泊する「ホームステイ制度」、町民投票による「特別賞」が設けられるなど、高校生と町民の接点も多く、「写真の町」が浸透したきっかけのイベントです。

「3人1組」で駆け抜ける4日間



3人の写真部員が、テーマをもとに8枚の組写真をひとつの大作として提出。撮影は東川町を中心とした近郊エリアで行われ、開催期間の4日間の中で、前半の「ファースト公開審査会」、最終日の「ファイナル公開審査会」を経て、優勝校を決定する仕組みです。審査で各校が思い思いに行うプレゼンテーションにも注目。

高校生に本気で向き合う6名の「審査委員」

公開審査会では6名の審査委員が、高校生の写真に向き合います。プロフェッショナルからの厳しいフィードバックに、時には涙を流す選手も。2023年の30回大会を機に、第1回大会の立ち上げから関わっていた写真家・立木義浩氏が審査委員長を勇退。31回大会からは、代表審査委員を野村恵子氏が務めています。



ひと夏を超え、町と続く深い関わり



初日に開かれる町民との歓迎夕食会やホームステイなどで、濃密な時間を過ごす高校生。この経験が、1回限りではなく、長く続く関係性を作っています。写真甲子園出身のサポートスタッフは毎年この大会を支え、卒業生らが主導する撮影企画「思い出写真館NIJI」は今やフォトフェスタの恒例企画に。

写真甲子園作品で 振り返る東川

歴代の写真甲子園出場校の作品から、町の様子が写った写真をピックアップ。懐かしの風景を振り返ります。



西町四丁目にあったレストラン「ピストラ」。当時はカフェやレストランも少なく、お洒落な飲食店の先駆け的存在。撮影：香川県立坂出高等学校（2004年）



旧第五小学校の正面入り口。1985年から現在に至るまで、北の住まい設計社の工房として活用されている。2025年で築97年。撮影：和光高等学校（2004年）



旧東川小学校の体育館。現在はせんとびゅあ！講堂。「力いっぱい、さあやろう」の文字は、新校舎体育館にも。撮影：大阪府立大手前高等学校（1996年）



東川町出身の農民彫刻家、松田与一氏の作品制作のシーン。2012年に逝去され、今や貴重な写真となっている。撮影：青森県立青森南高等学校（2004年）



西町一丁目にあった「松倉菓子舗」のどら焼き屋。このどら焼きは皮が美味しい、東川名物としても有名だった。撮影：新潟県立村松高等学校（2001年）



展望閣から町を一望した風景。どの田んぼの畔も綺麗に手入れされ、東川町が誇る美しい景色が広がる。

撮影：沖縄県立浦添工業高等学校（2013年）



現在の道の駅・道草館の隣に位置する山田商会。当時は自転車屋で、バイクの修理なども請け負っていた。

撮影：石巻市立女子高等学校（2013年）



宮崎豆腐店前から東側を眺めた町の風景。中心部の店舗や看板も、現在に比べると少しづつ変化している。

撮影：八代白百合学園高等学校（2007年）



2010年当時の松岡市郎町長と合田博副町長をとらえた、町長室での1枚。穏やかな表情から伝わる、選手を受け入れる空気感。撮影：正則高等学校（2010年）



居酒屋・大将の店前のシーン。お店正面玄関のレイアウトは変更されているものの、当時の面影は今もなお残る。撮影：新潟県立村松高等学校（1999年）



旧東川小学校の風景。現在のせんとぴゅあⅠの2階部分。今は日本語学校として、雰囲気もそのまま活用されている。撮影：岐阜県立岐阜高等学校（2000年）

高校生国際交流写真フェスティバル

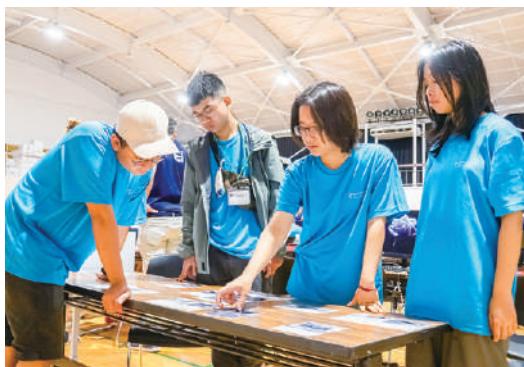
通称 HIGASHI-KAWAユースフェス



世界中の高校生が集う写真交流イベント

2015年にスタートした、世界の高校生を対象とした国際交流型の写真イベント。フォトフェスティバル中の8月下旬に開始され、写真を通じた異文化国際交流を目的としています。写真甲子園と同じく、3人1組がテーマに沿った作品（組写真）を提出。町と交流のある世界の国・地域から作品審査を通過した選抜校と、国内選抜校、東川高校を合わせた計21の高校（2024年度）が、写真を通じた交流にて友情の輪を広げます。選手が滞在する7日間の中で、撮影だけではなく、参加者同士や町民との交流会も開催され、世界中の地域文化の理解を深める場でもあります。賞は「団体の部」と「個人の部」に分かれ、各部に金・銀・銅賞の他、1日間のインターネット投票の特別選考賞などもあり、誰にでも開かれたコンテストです。

20カ国の高校生が写真に向き合う1週間



2024年は、日本も含めた世界20の国・地域より76名（4人1チーム：顧問1名、生徒3名）を東川町に招聘。さらに北海道東川高校の写真部の生徒も加え、計21校の高校生63名が写真表現を競います。審査員は外国人を含む、町内の写真家も合わせた5名。中間レビューと最終審査を経て、各賞が決定します。

共に闘う仲間たちとの、短くも熱い交流

撮影以外にも多くの催しが行われ、選手間や町民との交流が図られます。歓迎BBQ会にはじまり、盆踊りや和太鼓などの日本文化体験、選手が各国の文化を発表するイベント、東川高校による日本語教室なども実施。後半には「共に闘った仲間」として、選手同士がシャツに寄せ書きする姿や、別れ際の熱い抱擁も。



「東川町だから」できるユースフェス



このイベントが「東川町だからこそ実施可能」である理由のひとつが、町に滞在する「国際交流員（CIR）」の存在。町役場職員として11名（2025年4月現在）の外国人が常駐している東川町では、通訳・翻訳の対応が可能。CIRを中心に、日本語通訳者として大会期間中に1校に1名が同行します。

70年間東川を撮り続けた役場職員 賞名にも名を残す、

写真家 **飛弾野数右衛門**

2010年、写真の町 東川賞に「飛弾野数右衛門賞」が設立されました。長い年月をかけ、地域社会に貢献した写真家に贈られるこの賞は、まさに飛弾野数右衛門の生き方を示した賞とも言えます。

1914年、三人兄弟の長男として東川村に生まれた数右衛門。14歳の時、従兄からカメラを贈られ、その後約70年間写真を撮り続けました。17歳で役場職員となり、戦争で一時的に職務を離れたものの、定年まで従事。定年後も保育園所長や選挙管理委員会委員長も歴任し、1983年に全ての公務を終えるまで、町に尽くします。

日々の公務をこなしながら、カメラは必ず携えていた数右衛門。「弁

当箱とカメラは忘れたことがない」というほどの写真好きで、日記代わりに町のあらゆる風景を撮影します。そして写真を人に贈り、喜んでもらうことが自身の喜びでもありました。映像も多く残し、16mmフィルム映画

『東川ニュース』は、約20年間で30巻以上が制作されました。

その後、彼の写真への評価が高まり、1999年には東川町文化ギャラリーにて「飛弾野数右衛門写真展・昭和の東川」が開催。翌々年、第17回東川賞の特別作家賞を受賞します。2008年に逝去しますが、その功績を讃えて、2年後に「飛弾野数右衛門賞」が設立されました。写真の町の開始よりずっと前から、この町で写真に関わり続けた人物でした。



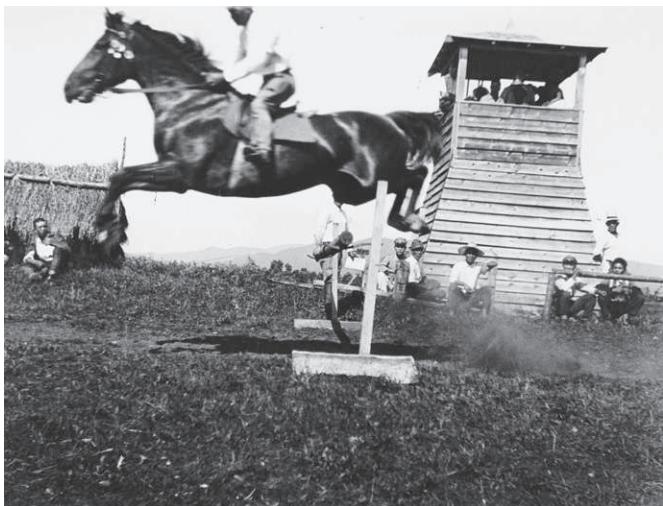
ひだのかずうえもん／東川町役場職員・写真家 1914年、東川村（現・東川町）生まれ。1928年に乾板カメラで写真を始める。1931年、町立永山農業学校（現・旭川農業高等学校）を卒業し、東川村役場勤務。1934～1963年に、16mmフィルム映画を撮影。1975年、東川町役場退職。1975～1983年、東川町選挙管理委員会委員長。1975～1979年、東川町立リリー保育所長。東川町カメラクラブの顧問も務めた。2001年に「写真の町」東川賞特別作家賞を受賞し、2008年に逝去。2009年、回顧展として東川町文化ギャラリー〈町制施行50年記念〉展示約150点【飛弾野数右衛門と東川町】「ぼくの日記帳は、カメラだった。」が開催された。



ヌプリコロカムイノミ（昭和30年代）



忠別公園競馬場でのモトクロスレース（昭和30年代）



東川競馬場での障害物レース（昭和20年代）



飛彈野家の孫の姉妹（1974年）



町制施行祝賀行事後の1コマ（昭和30年代）

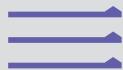


廃線となる直前、学校前駅の電車（昭和40年代）

P29～30の掲載作品は全て「昭和の東川」より 参考資料：「[飛彈野数右衛門と東川町] 特集 ぼくの日記帳は、カメラだった。」『自然と文化』68号、財団法人日本ナショナルトラスト、2002年



勇駒別の道路工事開始時。当時はキバナシャクナゲの花畠だった（昭和20年代）



「写真の町」を 支える

「写真の町」は、
町民を含めて多くの人たちの
手によってつくられてきた。
「写真の町」を長年支えてきた、
町の人々が楽しく語る、
特別座談会企画。



「企画委員」座談会

大変だけど、楽しみな夏

——企画委員って、どんな役割を担って
いるんですか？

藤原　自分たちで「写真の町」の企
画を提案するというのは最近のこと
で。きっかけはコロナ禍ですね。そ
れまでは、役場が決めたことをこな
すのが精一杯でした。

森田　たとえばフォトフェスタの
「受賞を祝う集い」（P35）は、ほと
んど企画委員が準備しています。今
はほぼ町の飲食店に発注するけれど、
数年前は料理約百名分の半分以上を

我々で作っていました。こうした準
備に精一杯で、とても自分たちで企
画をする状況じゃなくて。

能沢　町に来た方々の「おもてな
し」を僕たちがする感じ。どんな人

たちがフォトフェスタに来ているの
か、実はわかっていないことも多か

「写真の町」の
運営に欠かせない、
「企画委員」の存在を
ご存じですか？
様々な属性の町民が集い、
お互いに協力し合いながら
町を支え続ける集団です。
新旧4名の企画委員による
想いの詰まった座談会。



藤原 隆子さん

企画委員は'02~'22の20年間務め、副委員長も歴任。役場職員からの声かけが、企画委員に参加したきっかけ。

高島 郁宏さん

町の洋菓子屋、「月庵」の店主。企画委員を'04~'22の18年間務め、「20~'22には企画委員長を務めた。

森田 るり子さん

企画委員を'08~'19に務める。写真甲子園のホームステイも受け入れ「写真の町」に深く関わる若者のお母さん的存在。

能沢 勇人さん

ノザワ物産社長。'04から商工会青年部の担当として企画委員、「23から現在までは企画委員長を務めている。



「企画委員」とは？

「写真の町実行委員会 企画委員会（通称：企画委員）」は、「写真の町」事業の中に位置付けられている有志の市民組織。現在は28名が、フォトフェスタや写真甲子園のイベントをサポート。1991年のフォトフェスタ第7回からスタートし、任期は

1期3年。活動が盛んになるのは夏ですが、月に1度程度の会議が開催されます。メンバーは写真好きの市民だけでなく、農工商業の団体代表者など様々。それぞれの得意分野を活かしながら、「写真の町」と市民を繋ぐ役割を担っています。

忙しいけど、
結局は楽しいんだよね



つた。

藤原 でも、私たちもそれじゃダメだと思って。会場の雰囲気を見せてもらうとか、少しずつ「写真の町」の中身を見られるように関わらせてもらう努力はしてきましたね。

——みなさん10年以上務められていますが、なぜ「ボランティア」なのに、そんなに長く続けられたのですか？

藤原 うーん、それをやるのが当たり前だと思ってたから？（笑）

森田 でも、みんな生き生きしてたよね。お客様の期待に応えるために、慣れないことも一生懸命やって。

最初は僕らも
わからな
いこと
だらけだつた



高島 この町のボランティア力は、本当にすごいと思うよ。東川の人良さだと思う。

森田 「町に来る人たちが、この場

を楽しみにしている」という意識は

あつたから。私は写真甲子園のホー

ムステイの受け入れもして、毎年高

校生たちも来るから、「喜んでもら

えている」という実感はしていて。

高島 実際に喜んでくれる人の顔を、そばで見てるってことは大きいよね。

森田 「忙しい忙しい」って言いながら、夏のその忙しさを楽しみにしている感じはあつたよね。

積み重ねが「未来」に繋がる

——最近は、企画委員発案のイベントも増えてきたんですか？

藤原 2020年の「ポストカード展」(P.35)の頃からですね。コロナ禍で大きなイベントも減って、仕事に余裕ができたこともあり、まっさらな状態から企画をさせてもらえた。

展示 자체は大失敗したんだけど(笑)、企画委員のみんながすごく協力してくれて、とっても楽しかった。

能沢 このタイミングで、委員同士の繋がりができましたよね。

写真の町と
町民を繋ぐ、
黒子的存在



今や東川の大切な
コミュニケーションだよ



藤原 嬉しかったのは、企画提案時に、役場に「予算がないのでできません」って言われなかつたこと。

能沢 そうだよね。でもそれは、先輩たちの何十年の積み重ねがあったからこそ。

森田 その歴史があるからこそ、町役場も「リクエストに応えたい」っていう思いがあるんじゃないかな。

高島 積み重ねてきてくれた人たちに感謝だよね。

写真の町を楽しく伝える居場所

藤原 ただ企画委員って、本当は黒

子でいいと思うんですね。企画もできればいいけど「写真の町」と「町民」を繋ぐ立場だから、「今、写真の町はこんなことをしてるよ」って地道に町の人々に伝えるのが本来の役割じゃないかなって私は思います。

能沢 ふつうの人は「写真の町」に関わるきっかけが少ないからこそ、僕たちが伝える。

高島 そして企画委員は、この町にとつて重要な地域コミュニケーションのひとつだと思う。「写真の町」と、町民、そして外から来る人を交ぜる役割を持つていて。今の東川を支えるひとつつの要素になつてると思うな。

森田 責任を持つてまちづくりしてひつつの「居場所」だとも思います。

能沢 写真が趣味じゃない人もたくさんいる。職業も年齢もバラバラで、そこが企画委員の面白さだよね。

企画委員では、夏のイベントの時期だけ活動を手伝うボランティアチーム「ももんが隊」を募集しています。

問い合わせ：東川町役場 写真の町課 ☎0166-82-2111 (代)

「ももんが隊」募集中！

「東川賞」受賞を祝う集い



会期中のメインイベント、「写真の町 東川賞 授賞式」とあわせて開催される「受賞を祝う集い」は、毎年企画委員を中心となって準備。受賞者、審査会委員、写真甲子園関係者なども一堂に集う。郷土芸能羽衣太鼓保存会による和太鼓や、町内で獲れた鹿肉の提供が恒例行事で、毎年ここでの食事を楽しみにしている参加者も多い。

ポストカード展

2020年に企画委員が発案、運営した企画。「自身にとって元気が出るもの、ハマっているもの」の写真を撮り、大切な人や家族に写真ハガキを出すというアイデア。この企画をきっかけに、委員同士の交流も深まり、「自分たちで写真の企画ができる」という自信にも繋がった、現在の企画委員にとって印象的なイベントでもある。



オリジナルTシャツ



長年続くオリジナルTシャツ制作は、長らくデザイン会社から提案されたものを選ぶという形だった。2020年からは、企画委員が自分たちでデザインするように。毎年企画委員の中で「オリジナルTシャツ部会」が結成され、その年のイメージにあつたTシャツデザインを、手を動かしながら制作し、販売も担っている。

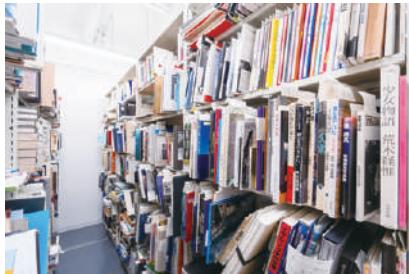
ふらっとPHOTOテラス

2021年に始まった、恒例企画で現在も続く自主運営企画。文化ギャラリーの前庭に、色とりどりの傘が展示され、フォトフェスタに訪れた方々がゆったりした時間を過ごしながら、写真を通して交流できる空間づくりを行う。フォトフェスタが開催されている東川町文化ギャラリーと、「どんとこい祭り」を繋ぐかけ橋的企画だ。



写真を 楽しむ東川

他にも東川町に存在する、
写真の魅力に触れて楽しめる
ユニークな写真環境をご紹介。



せんとぴゅあⅡの 写真集蔵書

町中心部に位置する複合交流施設「せんとぴゅあⅡ」には、過去40年間の歴代受賞者や受賞作品に関連した写真集をはじめ、開架・閉架合わせて約1600冊を収蔵。写真の町 東川賞の審査のために購入している作品も多く、貸し出しができないが貴重な写真集を楽しめる。



町が守り続けてきた 写真現像の暗室

町が保有する写真暗室には、引き伸ばし機が10台程あり、約5人が同時に暗室作業できる大きなスペース。町の写真家、渡辺信夫氏が長年管理し続けてきた。2025年からは町内有志による民間団体が運営をし、フィルム写真の魅力や価値を伝えるイベントを開催している。



国内外歴代作家の 写真コレクション

写真の町 東川賞は、オリジナルプリントを寄贈することが受賞条件となっている。第40回までに170名、3200作品以上を収蔵。町の資産でもあるこれらの貴重な作品群は、一年を通して東川町文化ギャラリーのコレクション展で定期的に見ることが可能。

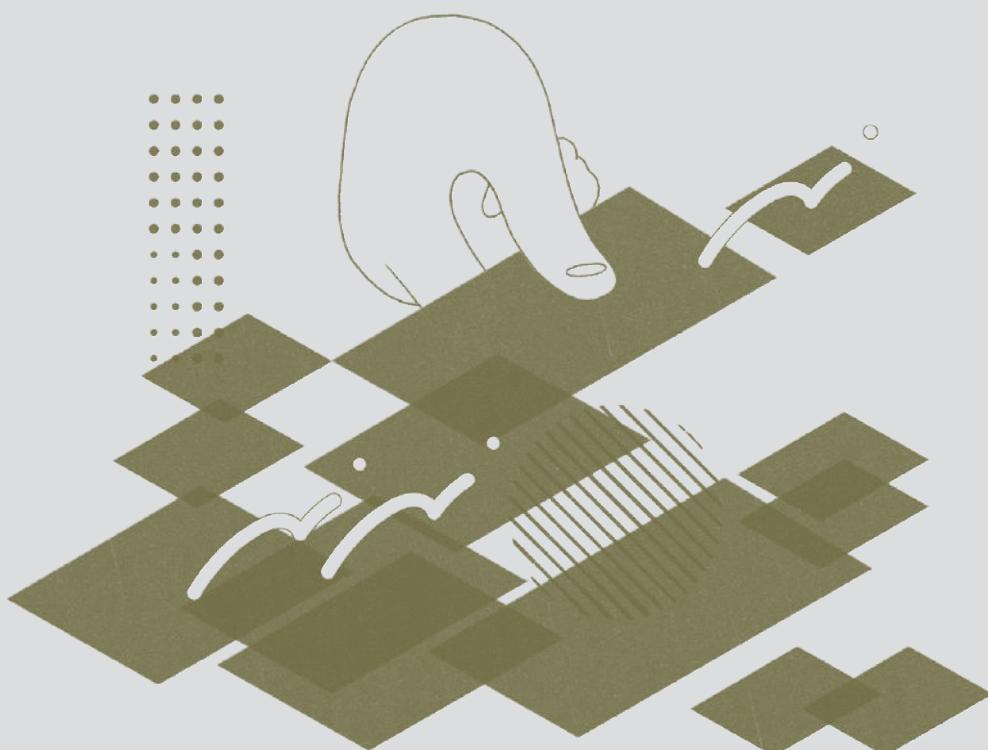


小中学生たちによる 「写真少年団」の活動

2013年春に結成し、「写真の上達への道は、撮影あるのみ！」をモットーに活動を開始した、「ひがしかわ写真少年団」。東川町内の小学3年生から中学3年生までが参加でき、2週に1回程度の頻度で活動。毎年2月には1年の集大成として写真展を開催している。

「写真の町」を
重ねる

40年歴史に
多くの人々が関わり、
厚みをつくり出してきた。
これまで積み重ねてきた。
「写真の町」の歴史の、
様々なデータベース。



写真の町 東川賞受賞者・審査会委員 1985~2024

第1回 (1985年)

海外作家賞：ジョール・スターンフェルド（アメリカ）／自然と人間社会の周辺をとらえた一連のカラー作品に対して

国内作家賞：須田一政／作品「日常の断片」と一連の作家活動に対して

田原桂一／写真集『世紀末建築』に対して

新人作家賞：該当者なし

特別作家賞：志賀芳彦／写真集『大雪』に対して

審査員：小池一子（クリエイティブディレクター）、重森弘淹（写真評論家）、長友啓典（アートディレクター）、

山口昌男（文化人類学者）、渡辺義雄（写真家）

第2回 (1986年)

海外作家賞：ルシアン・クレルグ（フランス）／一連のヌード作品及びアルル国際写真フェスティバル、

ワークショップ活動など、写真への貢献、功労に対して

国内作家賞：篠山紀信／一連の「シノラマ」作品（特にソウル・東京）に対して

新人作家賞：林隆喜／写真集『ZOO』に対して

特別作家賞：関口哲也／一連の風景写真作品及び作家活動に対して

審査員：植田正治（写真家）、小池一子（クリエイティブディレクター）、重森弘淹（写真評論家）、

長友啓典（アートディレクター）、山口昌男（文化人類学者）、渡辺義雄（写真家）

第3回 (1987年)

海外作家賞：ジョール・マイヤーウィツ（アメリカ）／写真集『ケープ・ライト』『セントルイス・アンド・ジ・アーチ』

他作家活動に対して

国内作家賞：奈良原一高／写真集『ヴェネツィアの光』に対して

新人作家賞：今道子／写真集『イート』に対して

特別作家賞：神部弘二／写真集『自然・花そして空知川』及び永年のアマチュア作家活動に対して

審査員：植田正治（写真家）、小池一子（クリエイティブディレクター）、重森弘淹（写真評論家）、

長友啓典（アートディレクター）、山口昌男（文化人類学者）、渡辺義雄（写真家）

第4回 (1988年)

海外作家賞：ルイス・ボルツ（アメリカ）／写真集『サン・ケンティン・ポイント』他作家活動に対して

国内作家賞：植田正治／写真展「砂丘」他作家活動に対して

新人作家賞：伊奈英次／写真展「ゾーン」に対して

特別作家賞：竹田津実／写真集『跳ベキタキツネ』『チロンヌップの詩』他作家活動に対して

審査員：植田正治（写真家）、小池一子（クリエイティブディレクター）、重森弘淹（写真評論家）、

長友啓典（アートディレクター）、奈良原一高（写真家）、山口昌男（文化人類学者）、渡辺義雄（写真家）

第5回 (1989年)

海外作家賞：石少華（中国）／写真集『石少華作品選』並びに中国写真界育成の功労に対して

国内作家賞：渡部雄吉／写真集『神楽』に対して

新人作家賞：築田純／写真集『スポーツシアター』に対して

特別作家賞：佐藤雅英／写真集『Boys, be ambitious! 北海道大学旧恵迪寮写真集』に対して

審査員：植田正治（写真家）、小池一子（クリエイティブディレクター）、重森弘淹（写真評論家）、

長友啓典（アートディレクター）、奈良原一高（写真家）、山口昌男（文化人類学者）、渡辺義雄（写真家）

第6回 (1990年)

海外作家賞：グラシエラ・イトゥルビーデ（メキシコ）／写真集『フチタンの女たち』に対して

国内作家賞：村井修／写真集『石の記憶』に対して

新人作家賞：佐藤時啓／写真展「呼吸の陰影」他一連の作家活動に対して

特別作家賞：操上和美／写真作家、広告写真家としての活動・功績に対して

審査員：植田正治（写真家）、小池一子（クリエイティブディレクター）、重森弘淹（写真評論家）、

長友啓典（アートディレクター）、奈良原一高（写真家）、山口昌男（文化人類学者）、渡辺義雄（写真家）



第7回 (1991年)

海外作家賞：ヤン・ザウデク（チェコ）／写真集『ヤン・ザウデクの世界』他一連の作家活動に対して
 国内作家賞：荒木経惟／一連の作家活動に対して
 新人作家賞：蓑田貴子／写真展「ダンシングミラー」「フリッカー」「フリッカー2」に対して
 特別作家賞：掛川源一郎／永年の作家活動に対して
 審査員：植田正治（写真家）、小池一子（クリエイティブディレクター）、重森弘淹（写真評論家）、
 長友啓典（アートディレクター）、奈良原一高（写真家）、山口昌男（文化人類学者）、渡辺義雄（写真家）

第8回 (1992年)

海外作家賞：オリーポ・バルビエリ（イタリア）／写真集『ノト』『夜』他一連の作家活動に対して
 国内作家賞：橋口譲二／写真集『ベルリン』に対して
 新人作家賞：古屋誠一／写真集『メモワール』に対して
 特別作家賞：深瀬昌久／写真集『鴉』『家族』他一連の作家活動に対して
 審査員：植田正治（写真家）、小池一子（クリエイティブディレクター）、重森弘淹（写真評論家）、
 長友啓典（アートディレクター）、奈良原一高（写真家）、山口昌男（文化人類学者）、渡辺義雄（写真家）

第9回 (1993年)

海外作家賞：ウイリアム・ヤン（オーストラリア）／写真集『スター・ティング・アゲイン』に対して
 国内作家賞：高梨豊／写真展「初國」並びに写真集『都の貌』等一連の東京シリーズに対して
 新人作家賞：猪瀬光／写真展「猪瀬光 INOSE Kou 1982-1992」に対して
 特別作家賞：清水武男／写真集『北飛行』『遊飛行』に対して
 審査員：植田正治（写真家）、小池一子（クリエイティブディレクター）、長友啓典（アートディレクター）、
 奈良原一高（写真家）、平木収（写真評論家）、山岸享子（写真ディレクター）、山口昌男（文化人類学者）、
 渡辺義雄（写真家）

第10回 (1994年)

海外作家賞：ミッシェル・カンポウ（カナダ）／写真集『鼓動』『日食と迷宮』他一連の作家活動に対して
 国内作家賞：新正卓／写真集『酋長の系譜』に対して
 新人作家賞：今森光彦／写真集『スカラベ』に対して
 特別作家賞：長倉洋海／写真集『マスード 愛しの大地アフガン』他一連の作家活動に対して
 審査員：植田正治（写真家）、小池一子（クリエイティブディレクター）、長友啓典（アートディレクター）、
 奈良原一高（写真家）、平木収（写真評論家）、山岸享子（写真ディレクター）、山口昌男（文化人類学者）、
 渡辺義雄（写真家）

第11回 (1995年)

海外作家賞：金秀男（韓国）／写真集『韓国のクッ（巫祭）』（全20巻、1983~93年）に対して
 国内作家賞：杉本博司／一連の作家活動に対して
 新人作家賞：瀬戸正人／写真展「Living Room, Tokyo 1989-1994」に対して
 特別作家賞：林田恒夫／永年の作家活動に対して
 審査員：植田正治（写真家）、杉浦康平（グラフィックデザイナー）、筑紫哲也（ジャーナリスト）、長野重一（写真家）、
 平木収（写真評論家）、山岸享子（写真ディレクター）、奈良原一高（写真家）

第12回 (1996年)

海外作家賞：グンドラ・シュルツェ（ドイツ）／一連の作家活動に対して
 国内作家賞：川田喜久治／写真展「ラスト・コスモロジー」に対して
 新人作家賞：松江泰治／一連の作家活動に対して
 特別作家賞：中村征夫／写真集『カムイの海』に対して
 審査員：岡部あおみ（美術評論家）、川田喜久治（写真家）、杉浦康平（グラフィックデザイナー）、
 筑紫哲也（ジャーナリスト）、長野重一（写真家）、奈良原一高（写真家）、平木収（写真評論家）、
 山岸享子（写真ディレクター）

第13回 (1997年)

海外作家賞：カラム・コルヴィン（イギリス）／一連の作家活動に対して
 国内作家賞：野町和嘉／写真集『SAHARA サハラ20年』に対して
 新人作家賞：金村修／一連の作家活動に対して
 特別作家賞：齋藤亮一／写真集『NOSTALGIA』に対して

審査員：岡部あおみ（美術評論家）、川田喜久治（写真家）、杉浦康平（グラフィックデザイナー）、
筑紫哲也（ジャーナリスト）、長野重一（写真家）、奈良原一高（写真家）、平木収（写真評論家）、
山岸享子（写真ディレクター）

第14回（1998年）

海外作家賞：アンソニー・ヘルナンデス（アメリカ）／写真集『Landscapes for the Homeless』他一連の
作家活動に対して

国内作家賞：管洋志／写真集『ミヤンマー黄金』他一連の作家活動に対して

新人作家賞：細川剛／写真集『森案内』に対して

特別作家賞：津山正順／写真集『檜山民俗建築照相譜』及び『檜山社寺建築照相譜』に対して

審査員：岡部あおみ（美術評論家）、川田喜久治（写真家）、杉浦康平（グラフィックデザイナー）、
筑紫哲也（ジャーナリスト）、長野重一（写真家）、平木収（写真評論家）、山岸享子（写真ディレクター）

第15回（1999年）

海外作家賞：クラウディオ・エディンガー（ブラジル）／写真集『CARNAVAL（カルナバル）』に対して

国内作家賞：石内都／写真集『1・9・4・7』から写真展『SCARS』に至る一連の作家活動に対して

新人作家賞：やなぎみわ／一連の作家活動に対して

特別作家賞：高田邦彦／写真展「結晶－雪－」「雪洞」に対して

審査員：岡部あおみ（美術評論家）、川田喜久治（写真家）、杉浦康平（グラフィックデザイナー）、
筑紫哲也（ジャーナリスト）、長野重一（写真家）、平木収（写真評論家）、山岸享子（写真ディレクター）

第16回（2000年）

海外作家賞：チャマ・マドウス（スペイン）／写真集『オブジェ』に至る一連の作家活動に対して

国内作家賞：畠山直哉／作品「アンダーグラウンド」に至る一連の作家活動に対して

新人作家賞：野村恵子／写真集『ディープ・サウス』に対して

特別作家賞：窪田正克／写真集『知床』『ヒグマ』に至る一連の作家活動に対して

審査員：岡部あおみ（美術評論家）、川田喜久治（写真家）、佐藤時啓（写真家）、
杉浦康平（グラフィックデザイナー）、筑紫哲也（ジャーナリスト）、長野重一（写真家）、
平木収（写真評論家）、山岸享子（写真ディレクター）

第17回（2001年）

海外作家賞：アンドリュース・グランツ（ラトビア）／写真展「Latvia. Canging and Unchanging Reality /
ラトビア・移ろいとたたずみ」に対して

国内作家賞：細江英公／一連の作家活動に対して

新人作家賞：オノデラユキ／一連の作家活動に対して

特別作家賞：飛彈野数右衛門／写真展「昭和の東川」他、永年の作家活動に対して

審査員：岡部あおみ（美術評論家）、佐藤時啓（写真家）、杉浦康平（グラフィックデザイナー）、
筑紫哲也（ジャーナリスト）、長野重一（写真家）、平木収（写真評論家）、山岸享子（写真ディレクター）

第18回（2002年）

海外作家賞：エド温イン・ズワックマン（オランダ）／シリーズ「ファサード」に至る一連の作家活動に対して

国内作家賞：森村泰昌／作品展「私の中のフリーダ／森村泰昌のセルフポートレイト」に至る一連の作家活動に
に対して

新人作家賞：尾仲浩二／シリーズ「背高あわだち草」から写真集『ヒステリックファイブ』に至る一連の作家活動に
に対して

特別作家賞：風間健介／夕張炭鉱遺跡にかかる一連の作品に対して

審査員：岡部あおみ（美術評論家）、佐藤時啓（写真家）、杉浦康平（グラフィックデザイナー）、
筑紫哲也（ジャーナリスト）、長野重一（写真家）、平木収（写真評論家）、山岸享子（写真ディレクター）

第19回（2003年）

海外作家賞：ガイ・ティリム（南アフリカ）／写真集『departure（出発）』に対して

国内作家賞：齋藤亮一／写真集『Lost China』に対して

新人作家賞：糸崎公朗／作品「フォトモ」他一連の作家活動に対して

特別作家賞：吉田ルイ子／写真集『華齢な女たち』に対して

審査員：岡部あおみ（美術評論家）、佐藤時啓（写真家）、杉浦康平（グラフィックデザイナー）、
筑紫哲也（ジャーナリスト）、長野重一（写真家）、平木収（写真評論家）、山岸享子（写真ディレクター）

第20回（2004年）

海外作家賞：アントワーヌ・ダガタ（フランス）／写真集『INSOMNIA（不眠症）』に対して
 国内作家賞：中川幸夫／写真集『魔の山』に至る写真を用いた一連の作家活動に対して
 新人作家賞：藤部明子／写真集『The Hotel Upstairs/ホテル・アップステアーズ』に対して
 特別作家賞：倉沢栄一／写真集『日本の海大百科』他一連の作家活動に対して
 審査員：岡部あおみ（美術評論家）、佐藤時啓（写真家）、杉浦康平（グラフィックデザイナー）、
 筑紫哲也（ジャーナリスト）、長野重一（写真家）、平木収（写真評論家）、山岸享子（写真ディレクター）

第21回（2005年）

海外作家賞：金寧万（韓国）／写真集『激動20年』に対して
 国内作家賞：小山穂太郎／写真展「ファントム」に至る一連の作家活動に対して
 新人作家賞：小檜山賢二／写真展「昆虫：ミクロ・リアリズム」に対して
 特別作家賞：鈴木涼子／一連の作家活動に対して
 審査員：岡部あおみ（美術評論家）、佐藤時啓（写真家）、杉浦康平（グラフィックデザイナー）、
 筑紫哲也（ジャーナリスト）、長野重一（写真家）、平木収（写真評論家）、山岸享子（写真ディレクター）

第22回（2006年）

海外作家賞：ケタキ・シェス（インド）／作品「BOMBAY MIX」に対して
 国内作家賞：鈴木理策／作品「KUMANO」「SAKURA」「Mont Sainte Victoire」に対して
 新人作家賞：安楽寺えみ／1998~2005年に制作された私家版写真集と作品に対して
 特別作家賞：綿谷修／作品「Agenda」「昼顔」に対して
 審査員：岡部あおみ（美術評論家）、佐藤時啓（写真家）、杉浦康平（グラフィックデザイナー）、
 筑紫哲也（ジャーナリスト）、長野重一（写真家）、平木収（写真評論家）、山岸享子（写真ディレクター）

第23回（2007年）

海外作家賞：マニット・シリワニチブーン（タイ）／シリーズ「ピンク・マン」「ブラック&ホワイト・バンコク」
 「イン・ユア・フェイス」等の作品制作に対して
 国内作家賞：杉浦邦恵／フォトグラムによる一連の作品制作に対して
 新人作家賞：今岡昌子／「リ・バース」「天山南路」の作品制作に対して
 特別作家賞：山田博之／「ロマンス」「残雪」の作品制作に対して
 審査員：岡部あおみ（美術評論家）、笠原美智子（写真評論家）、佐藤時啓（写真家）、
 杉浦康平（グラフィックデザイナー）、筑紫哲也（ジャーナリスト）、野町和嘉（写真家）、
 平木収（写真評論家）、山岸享子（写真ディレクター）

第24回（2008年）

海外作家賞：クラウス・ミッテルドルフ（ブラジル）／「THE LAST CRY」「INTROVISION」の作品制作に対して
 国内作家賞：橋橋朝子／「half awake and half asleep in the water」の作品制作に対して
 新人作家賞：澤田知子／「ID400」以降の一連の作品制作に対して
 特別作家賞：小畠雄嗣／「二月」（Wintertale）の作品制作に対して
 審査員：浅葉克己（デザイナー）、岡部あおみ（美術評論家）、笠原美智子（写真評論家）、
 佐藤時啓（写真家）、野町和嘉（写真家）、平野啓一郎（作家）、山岸享子（写真ディレクター）

第25回（2009年）

海外作家賞：アン・フェラン（オーストラリア）／一連の作家活動に対して
 国内作家賞：柴田敏雄／写真展「ランドスケープ」及び一連の作家活動に対して
 新人作家賞：石川直樹／「New Dimension」以降の一連の作品制作に対して
 特別作家賞：露口啓二／北海道のアイヌ語地名をテーマとした一連の作品制作に対して
 審査員：浅葉克己（デザイナー）、岡部あおみ（美術評論家）、笠原美智子（写真評論家）、楠本亜紀（写真評論家）、
 佐藤時啓（写真家）、野町和嘉（写真家）、平野啓一郎（作家）、山崎博（写真家）

第26回（2010年）

海外作家賞：陳敬寶（台湾）／一連の作家活動に対して
 国内作家賞：北島敬三／写真展「北島敬三1975-1991」（東京都写真美術館、2009年）及び一連の作家活動に
 対して
 新人作家賞：オサム・ジェームス・中川／「ジェームス中川写真展-BANTA-」（佐喜眞美術館、2009年）、
 写真展「BANTA：沁みついた記憶」（銀座ニコンサロン、2010年）に対して
 特別作家賞：萩原義弘／写真集『SNOWY』（冬青社、2008年）及び夕張定点観測の作品に対して

飛彈野数右衛門賞：小島一郎／青森を拠点とした一連の作家活動に対して

審査員：浅葉克己（デザイナー）、岡部あおみ（美術評論家）、笠原美智子（写真評論家）、楠本亜紀（写真評論家）、佐藤時啓（写真家）、野町和嘉（写真家）、平野啓一郎（作家）、山崎博（写真家）

第27回（2011年）

海外作家賞：ピーター・ドレスラー（オーストリア）／一連の作家活動に対して

国内作家賞：オノデラユキ／一連の作家活動に対して

新人作家賞：北野謙／「our face」プロジェクト及び写真集『溶游する都市』（MEM、2009年）に対して

特別作家賞：奥田寅／作品集『生命樹』（新樹社、2010年）に対して

飛彈野数右衛門賞：百々俊二／写真集『大阪』（青幻舎、2010年）及び長年の地域における写真教育への貢献に
に対して

審査員：浅葉克己（デザイナー）、笠原美智子（写真評論家）、楠本亜紀（写真評論家）、佐藤時啓（写真家）、
野町和嘉（写真家）、平野啓一郎（作家）、光田由里（美術評論家）、山崎博（写真家）

第28回（2012年）

海外作家賞：アリフ・アシュジュ（トルコ）／イスタンブルを撮影した一連の写真制作に対して

国内作家賞：松江泰治／一連の作家活動に対して

新人作家賞：志賀理江子／2009年からの宮城県名取市での活動及び一連の作家活動に対して

特別作家賞：宇井眞紀子／写真展・写真集『アイヌ、風の肖像』（新泉社、2011年）及びアイヌ民族を取材した
一連の作家活動に対して

飛彈野数右衛門賞：南良和／郷土の秩父を長年にわたり撮影し続けてきた活動に対して

審査員：浅葉克己（デザイナー）、笠原美智子（写真評論家）、楠本亜紀（写真評論家）、佐藤時啓（写真家）、
野町和嘉（写真家）、平野啓一郎（作家）、光田由里（美術評論家）、山崎博（写真家）

第29回（2013年）

海外作家賞：ミンストレル・キュイク・チン・チュー（マレーシア）／作品プロジェクト「Mer.rily Mer.rily Mer.rily
Mer.rily」に至る一連の作家活動に対して

国内作家賞：川内倫子／写真展「照度 あめつち 影を見る」（東京都写真美術館、2012年）及び一連の作家活動に
に対して

新人作家賞：初沢亜利／写真集『隣人。38度線の北』（徳間書店、2012年）及び『True Feelings-爪痕の真情。
2011.3.12~2012.3.11』（三栄書房、2012年）に対して

特別作家賞：中藤毅彦／写真集・写真展『Sakuan, Matapaan-HOKKAIDO』（Zen Foto Gallery、2013年）に
に対して

飛彈野数右衛門賞：山田寅／『山田寅写真集 故郷は戦場だった』（未來社、2012年）、
写真展「山田寅展 人と時の往来-写真でつづるオキナワ」（沖縄県立博物館・美術館、2012年）
及び郷土の沖縄を長年にわたり撮影し続けてきた活動に対して

審査員：浅葉克己（デザイナー）、笠原美智子（写真評論家）、楠本亜紀（写真評論家）、佐藤時啓（写真家）、
野町和嘉（写真家）、平野啓一郎（作家）、光田由里（美術評論家）、山崎博（写真家）

第30回（2014年）

海外作家賞：ヨルマ・プラーネン（フィンランド）／「Icy Prospects」他、一連の作家活動に対して

国内作家賞：野口里佳／写真展「光は未来に届く」（IZU PHOTO MUSEUM、2011年）及び一連の作家活動に対して

新人作家賞：石塚元太良／写真集『PIPELINE ICELAND/ALASKA』（euphoria FACTORY/講談社、2013年）に
に対して

特別作家賞：酒井広司／「偶景/SightSeeing」シリーズに至る北海道を撮影した一連の作品に対して

飛彈野数右衛門賞：増山たづ子／ダムに沈む徳山村を撮影した一連の活動に対して

審査員：浅葉克己（デザイナー）、笠原美智子（写真評論家）、楠本亜紀（写真評論家）、佐藤時啓（写真家）、
野町和嘉（写真家）、平野啓一郎（作家）、光田由里（美術評論家）、山崎博（写真家）

第31回（2015年）

海外作家賞：アン・ノーブル（ニュージーランド）／写真集『The Last Road』（Clouds、2014年）他、一連の
作家活動に対して

国内作家賞：佐藤時啓／写真展「光-呼吸」（東京都写真美術館、2014年）及び一連の作家活動に対して

新人作家賞：春木麻衣子／写真展「みることについての展開図」（TARO NASU Gallery、2014年）に至る
一連の作家活動に対して

特別作家賞：吉村和敏／写真集『CEMENT』（ノストロ・ボスコ、2010年）に対して



飛彈野数右衛門賞：福島菊次郎／郷土の瀬戸内を出発点とし、広島の原爆問題を皮切りに、戦後日本の問題を一貫して撮り続けた活動に対して

審査員：浅葉克己（デザイナー）、上野修（写真評論家）、笠原美智子（写真評論家）、楠本亜紀（写真評論家）、野町和嘉（写真家）、平野啓一郎（作家）、光田由里（美術評論家）、山崎博（写真家）

第32回（2016年）

海外作家賞：オスカー・ムニヨス（コロンビア）／写真展「Protographs」（Jeu de paume、2014年、パリ他）及び一連の作家活動に対して

国内作家賞：広川泰士／写真集『BABEL-ORDINARY LANDSCAPES-』（赤々舎、2015年）及び一連の作家活動に対して

新人作家賞：池田葉子／写真集『MONKEY PUZZLE』（Nazraeli Press、2015年）に対して

特別作家賞：マイケル・ケンナ／北海道を撮影した一連の写真に対して

飛彈野数右衛門賞：池本喜巳／「近世店屋考」シリーズなど、鳥取を中心とした山陰地方の風物を長年撮影し続けてきた功績に対して

審査員：浅葉克己（デザイナー）、上野修（写真評論家）、笠原美智子（写真評論家）、楠本亜紀（写真評論家）、野町和嘉（写真家）、平野啓一郎（作家）、光田由里（美術評論家）、山崎博（写真家）

第33回（2017年）

海外作家賞：アンナ・オルオーヴスカ（ポーランド）／「Case study: invisibility」（2012～14年）他、一連の作品に対して

国内作家賞：本橋成一／写真展「在り処」（IZU PHOTO MUSEUM、2016年）及び一連の作家活動に対して

新人作家賞：野村佐紀／写真集『もうひとつの黒闇 Another Black Darkness』（Akio Nagasawa Publishing、2016年）及び一連の作家活動に対して

特別作家賞：岡田敦／シリーズ「ユルリ島の野生馬」及び写真集『1999』（ナガトモ、2015年）に対して

飛彈野数右衛門賞：小関与四郎／写真集『九十九里浜』（春風社、2004年）他、郷土・千葉に根差した社会事象、風物を長年にわたり撮影し続けてきた活動に対して

審査員：浅葉克己（デザイナー）、上野修（写真評論家）、北野謙（写真家）、楠本亜紀（写真評論家）、丹羽晴美（写真評論家）、中村征夫（写真家）、平野啓一郎（作家）、光田由里（美術評論家）

第34回（2018年）

海外作家賞：マリアン・ペナー・バンクロフト（カナダ）／「radial systems」（2017年）シリーズほか一連の作品に対して

国内作家賞：潮田登久子／『本の景色／BIBLIOTHECAシリーズ』（ウシマオダ／幻戯書房、2016～17年）に関する一連の発表に対して

新人作家賞：吉野英理香／写真集『NEROLI』（赤々舎、2016年）及び、「無垢と経験の写真 日本の新進作家 vol.14」展（東京都写真美術館、2017年）出品作に対して

特別作家賞：大橋英児／「Roadside Lights」シリーズ（2008年～）及び「Being there」シリーズ（2008年～）に対して

飛彈野数右衛門賞：富岡畦草／写真集『変貌する都市の記録』（白揚社、2017年）他、東京を定点観測で撮影し続けてきた活動に対して

審査員：上野修（写真評論家）、北野謙（写真家）、楠本亜紀（写真評論家）、柴崎友香（小説家）、丹羽晴美（写真評論家）、中村征夫（写真家）、原耕一（アートディレクター）、光田由里（美術評論家）

第35回（2019年）

海外作家賞：ローズマリー・ラング（オーストラリア）／「weather」（2006年）、「leak」（2010年）、「Buddens」（2017年）シリーズ他一連の作品に対して

国内作家賞：志賀理江子／写真展「ブラインドデート」（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2017年）、写真集『ブラインドデート』（T&M Projects、2017年）他一連の作品に対して

新人作家賞：片山真理／写真展「帰途」（群馬県立近代美術館、2017年）及び、「無垢と経験の写真 日本の新進作家 vol. 14」展（東京都写真美術館、2017年）出品作他一連の作品に対して

特別作家賞：奥山淳志／写真集『弁造 Benzo』（私家版、2018年）及び写真展「庭とエスキース」（銀座、大阪ニコンサロン、2018年）に対して

飛彈野数右衛門賞：太田順一／写真集『ひがた記』（海風社、2018年）、『無常の菅原商店街』（ブレーンセンター、2015年）、『群集のまち』（ブレーンセンター、2007年）他、関西地方を撮影し続けてきた作品に対して

審査員：上野修（写真評論家）、北野謙（写真家）、倉石信乃（写真批評家・詩人）、柴崎友香（小説家）、丹羽晴美（写真評論家）、中村征夫（写真家）、原耕一（アートディレクター）、光田由里（美術評論家）

第36回（2020年）

海外作家賞：グレゴリ・マイオフィス（ロシア）／写真集『Proverbs』（Nazraeli Press、2014年）、

「Mixed Reality」シリーズ（2018年～）及び一連の作品に対して

国内作家賞：長島有里枝／写真展「長島有里枝 そしてひとつまみの皮肉と、愛を少々。」（東京都写真美術館、2017年）、「作家で、母で つくる そだてる 長島有里枝」（ちひろ美術館・東京、2018年）、「知らない言葉の花の名前 記憶にない風景 わたしの指には読めない本」（横浜市民ギャラリーあざみ野、2019年）他、一連の作品に対して

新人作家賞：上原沙也加／写真展「The Others」（キヤノンオープニングギャラリー1、INTERFACE-Shomei Tomatsu Lab.、2019年）に対して

特別作家賞：高橋健太郎／写真展「赤い帽子」（銀座、大阪ニコンサロン、2019年）に対して

飛彈野数右衛門賞：鬼海弘雄／写真集『PERSONA 最終章』（筑摩書房、2019年）、『PERSONA』（草思社、2003年）、『東京夢譚-labyrinthos』（草思社、2007年）、『東京迷路』（小学館、1999年）他、東京を撮り続けてきた作品に対して

審査員：安珠（写真家）、上野修（写真評論家）、北野謙（写真家）、倉石信乃（写真批評家・詩人）、柴崎友香（小説家）、丹羽晴美（学芸員・写真論）、原耕一（デザイナー）、光田由里（美術評論家）

第37回（2021年）

海外作家賞：莫毅（中国）／「1m、私の後ろの風景」（1989年）、「私は犬だ」（1996年）及び一連の作品に対して

国内作家賞：瀬戸正人／写真展「記憶の地図」（東京都写真美術館、2020年）に対して

新人作家賞：岩根愛／写真集『KIPUKA』（青幻舎、2018年）、写真展「あしたのひかり 日本の新進作家 vol.17」（東京都写真美術館、2020年）他、一連の発表活動に対して

特別作家賞：白石ちえこ／写真集『鹿渡り』（蒼穹舎、2020年）に対して

飛彈野数右衛門賞：中野正貴／写真展「東京」（東京都写真美術館、2019年）、『東京』（クレヴィス、2019年）、『東京窓景』（河出書房新社、2004年）、『TOKYO NOBODY』（リトルモア、2000年）他、東京を撮り続けてきた作品に対して

審査員：安珠（写真家）、上野修（写真評論家）、神山亮子（学芸員・戦後日本美術史）、北野謙（写真家）、倉石信乃（写真評論家・詩人）、柴崎友香（小説家）、丹羽晴美（学芸員・写真論）、原耕一（デザイナー）

第38回（2022年）

海外作家賞：ハ・ダオ（ベトナム）／『The Mirror』（2016～17年）、『Forget Me Not』（2017年）、『All Things Considered』（2019年）など、一連の作品に対して

国内作家賞：鷹野隆大／エッセイ集『毎日写真』（ナラク社、2019年）、写真展「毎日写真1999～2021」（国立国際美術館、2021年）に対して

新人作家賞：笹岡啓子／小冊子シリーズ『SHORELINE』（KULA、2015年～）、写真集『Remembrance 三陸、福島 2011～2014』（写真公園林、2021年）に対して

特別作家賞：エレナ・トゥタッチコワ／二人展「Land and Beyond | 大地の声をたどる」（ボーラ ミュージアム アネックス、2021年）他、知床における一連の作品に対して

飛彈野数右衛門賞：宮崎学／写真展「イマドキの野生動物」（東京都写真美術館、2021年）などにおける、長野県駒ヶ根を拠点とした一連の作品に対して

審査員：安珠（写真家）、上野修（写真評論家）、神山亮子（学芸員・戦後日本美術史）、北野謙（写真家）、倉石信乃（写真評論家・詩人）、柴崎友香（小説家）、丹羽晴美（学芸員・写真論）、原耕一（デザイナー）

第39回（2023年）

海外作家賞：アストリッド・ヤーンセン（ベルー）／『On Your Knees』（2017年）、『Backdrop』（2018年）、『The Lost Gaze』（2019年～）など、一連の作品に対して

国内作家賞：原美樹子／写真集『Small Myths』（Chose Commune、2022年）に対して

新人作家賞：藤岡亜弥／写真展「New Stories ニュー・ストーリーズ」（奈良市写真美術館、2022年）、「ぎこちない会話への対応策—第三波フェミニズムの視点で」（金沢21世紀美術館、2021年）他、近年の多様な活動に対して

特別作家賞：石川直樹／写真集『SAKHALIN』（アマナ、2015年）、『知床半島』（北海道新聞社、2017年）、2016年から展開されている「写真ゼロ番地」の一連のプロジェクトに対して

飛彈野数右衛門賞：広田尚敬／長年にわたって地域の人・自然・文化と密接に関連している鉄道を撮り続けている活動に対して

審査員：安珠（写真家）、上野修（写真評論家）、神山亮子（学芸員・戦後日本美術史）、北野謙（写真家）、倉石信乃（写真評論家・詩人）、柴崎友香（小説家）、丹羽晴美（学芸員・写真論）、原耕一（デザイナー）



第40回（2024年）

海外作家賞：ヴァサンタ・ヨガナンタン（フランス）／長期プロジェクト「A Myth of Two Souls」における一連の作品に対して

国内作家賞：石川真生／写真展「石川真生 - 私に何ができるか -」（東京オペラシティ アートギャラリー、2023年）に対して

新人作家賞：金川晋吾／写真集『長い間』（ナナリイ、2023年）、文芸書『いなくなっていない父』（晶文社、2023年）に対して

特別作家賞：北海道101集団撮影行動／全日本学生写真連盟が1968～77年の間に行った北海道における19回の集団撮影行動に対して

飛彈野数右衛門賞：北井一夫／写真展「フナバシストーリー」（船橋市民ギャラリー、2023年）に対して

審査員：安珠（写真家）、上野修（写真評論家）、神山亮子（学芸員・戦後日本美術史）、北野謙（写真家）、

小原真史（キュレーター・写真史）、柴崎友香（小説家）、丹羽晴美（学芸員・写真論）、

原耕一（アートディレクター）

※肩書は参加当時。

全国高等学校写真選手権大会（写真甲子園）本戦結果

1994～2024

第1回（1994年）

優勝（北海道知事賞）：愛光（四国）／準優勝（北海道新聞社賞）：筑紫台（九州・沖縄）／優秀賞（東川町長賞）：島根県立松江工業（中国）／優秀賞（美瑛町長賞）：中越（中部・東海）／優秀賞（上富良野町長賞）：日本大学三島（中部・東海）／特別賞：函館白百合学園（北海道）、福島県立磐城女子（東北）、栃木県立宇都宮白楊（関東）、足利工業大学附属（関東）、メリノール女子学院（近畿）、大阪市立工芸（近畿）、東福岡（九州・沖縄）

第2回（1995年）

優勝（北海道知事賞）：函館白百合学園（北海道）／準優勝（北海道新聞社賞）：愛媛県立大洲農業（四国）／優秀賞（東川町長賞）：市川（近畿）／優秀賞（美瑛町長賞）：筑紫台（九州・沖縄）／優秀賞（上富良野町長賞）：岐阜県立大垣工業（中部・東海）／特別賞：青森県立青森工業（東北）、足利工業大学附属（関東）、千葉県立天羽（関東）、新潟明訓（中部・東海）、兵庫県立星陵（近畿）、山口県立西京（中国）、八代白百合学園（九州・沖縄）

第3回（1996年）

優勝（北海道知事賞）：大阪府立大手前定時制（近畿）／準優勝（北海道新聞社賞）：函館白百合学園（北海道）／優秀賞（東川町長賞）：青森県立青森南（東北）／優秀賞（美瑛町長賞）：大阪市立工芸（近畿）／優秀賞（上富良野町長賞）：日本大学三島（中部・東海）／特別賞：栃木県立宇都宮白楊（関東）、神奈川県立鶴見（関東）、中越（中部・東海）、広島県立三和（中国）、愛媛県立上浮穴（四国）、筑紫台（九州・沖縄）、福岡県立築上西（九州・沖縄）

第4回（1997年）

優勝（北海道知事賞）：東京学芸大学附属大泉校舎（関東）／準優勝（北海道新聞社賞）：大阪市立工芸（近畿）／優秀賞（東川町長賞）：愛光（四国）／優秀賞（美瑛町長賞）：北星学園余市（北海道）／優秀賞（上富良野町長賞）：鳥取県立鳥取聲学校（中国）／特別賞：青森県立青森南（東北）、成田（関東）、中越（中部・東海）、豊川（中部・東海）、京都府立綾部（近畿）、福岡県立築上西（九州・沖縄）、沖縄県立豊見城（九州・沖縄）

第5回（1998年）

優勝（北海道知事賞）：岩手県立盛岡北（東北）／準優勝（北海道新聞社賞）：北海道幌北（北海道）／優秀賞（東川町長賞）：沖縄県立北山（九州・沖縄）／優秀賞（美瑛町長賞）：福岡県立宇美商業（九州・沖縄）／優秀賞（上富良野町長賞）：大阪市立工芸（近畿）／特別賞：茨城県立笠間（関東）、神奈川県立鶴見（関東）、中越（中部・東海）、岐阜県立大垣工業（中部・東海）、海星（近畿）、岡山県立玉野光南（中国）、愛媛県立今治東（四国）

第6回(1999年)

優勝(北海道知事賞): 新潟県立十日町総合(中部・東海)／準優勝(北海道新聞社賞): 八代白百合学園(九州・沖縄)／優秀賞(東川町長賞): 広島県立三和(中国)／優秀賞(美瑛町長賞): 大阪市立工芸(近畿)／優秀賞(上富良野町長賞): 札幌静修(北海道)／特別賞: 秋田県立横手(東北)、三浦(関東)、川崎市立川崎総合科学(関東)、新潟県立村松(中部・東海)、兵庫県立小野工業(近畿)、香川県立土庄(四国)、沖縄県立真和志(九州・沖縄)

第7回(2000年)

優勝(北海道知事賞): 北海道札幌厚別(北海道)／準優勝(北海道新聞社賞): 岐阜県立岐阜(中部・東海)／優秀賞(東川町長賞): 愛媛県立大洲農業(四国)／優秀賞(美瑛町長賞): 広島県立三和(中国)／優秀賞(上富良野町長賞): 新潟県立十日町総合(中部・東海)／特別賞: 青森県立青森南(東北)、山形県立酒田商業(東北)、茨城県立笠間(関東)、栃木県立宇都宮白楊(関東)、三浦(関東)、大阪市立工芸(近畿)、兵庫県立小野工業(近畿)、熊本県立東稜(九州・沖縄)、沖縄県立真和志(九州・沖縄)

第8回(2001年)

優勝(北海道知事賞): 秋田県立横手(東北)／準優勝(北海道新聞社賞): 大阪市立工芸(近畿)／優秀賞(東川町長賞): 愛媛県立大洲農業(四国)／優秀賞(美瑛町長賞): 兵庫県立小野工業(近畿)／優秀賞(上富良野町長賞): 甲陵(中部・東海)／特別賞: 北海道旭川凌雲(北海道)、青森県立大畑(東北)、茨城県立牛久栄進(関東)、埼玉栄(関東)、千葉県立成東(関東)、新潟県立村松(中部・東海)、広島県立庄原格致(中国)、八代白百合学園(九州・沖縄)、沖縄県立那覇工業(九州・沖縄)

第9回(2002年)

優勝(北海道知事賞): 青森県立青森南(東北)／準優勝(北海道新聞社賞): 鳥取県立鳥取聲学校(中国)／優秀賞(東川町長賞): 三重県立上野(近畿)／優秀賞(美瑛町長賞): 八代白百合学園(九州・沖縄)／優秀賞(上富良野町長賞): 大阪市立工芸(近畿)／特別賞: 北星学園余市(北海道)、宮城県泉松陵(東北)、栃木県立栃木農業(関東)、川崎市立川崎総合科学(関東)、三浦(関東)、甲陵(中部・東海)、岐阜県立大垣工業(中部・東海)、愛媛県立松山西(四国)、沖縄県立真和志(九州・沖縄)

第10回(2003年)

優勝(北海道知事賞): 沖縄県立真和志(九州・沖縄)／準優勝(北海道新聞社賞): 八代白百合学園(九州・沖縄)／優秀賞(東川町長賞): 埼玉栄(関東)／優秀賞(美瑛町長賞): 初芝(近畿)／優秀賞(上富良野町長賞): 埼玉県立大井(関東)／特別賞: 北海道旭川工業(北海道)、宮城県氣仙沼向洋(東北)、秋田県立横手(東北)、栃木県立栃木農業(関東)、新潟県立十日町総合(中部・東海)、岐阜県立大垣工業(中部・東海)、三重県立上野(近畿)、広島県立三次(中国)、愛媛県立大洲農業(四国)

第11回(2004年)

優勝(北海道知事賞): 青森県立青森南(東北)／準優勝(北海道新聞社賞): 沖縄県立真和志(九州・沖縄)／優秀賞(東川町長賞): 広島県立庄原格致(中国)／優秀賞(美瑛町長賞): 大阪市立工芸(近畿)／優秀賞(上富良野町長賞): 兵庫県立香寺(近畿)／特別賞: 北海道旭川工業(北海道)、秋田県立大館(東北)、埼玉栄(関東)、千葉黎明(関東)、和光(関東)、新潟県立十日町総合(中部・東海)、聖靈(中部・東海)、香川県立坂出(四国)、沖縄県立浦添工業(九州・沖縄)

第12回(2005年)

優勝(北海道知事賞): 北海道旭川工業(北海道)／準優勝(北海道新聞社賞): 岩手県立盛岡北(東北)／優秀賞(東川町長賞): 新潟県立十日町総合(中部・東海)／優秀賞(美瑛町長賞): 大阪市立工芸(近畿)／優秀賞(上富良野町長賞): 沖縄県立真和志(九州・沖縄)／特別賞: 秋田県立横手(東北)、埼玉栄(関東)、和光(関東)、東京都立光丘(関東)、岐阜県立土岐商業(中部・東海)、兵庫県立香寺(近畿)、岡山県立玉野光南(中国)、愛光(四国)、沖縄県立那覇工業(九州・沖縄)

第13回(2006年)

優勝(北海道知事賞): 沖縄県立真和志(九州・沖縄)／準優勝(北海道新聞社賞): 青森県立青森南(東北)／優秀賞(東川町長賞): 埼玉栄(関東)／優秀賞(美瑛町長賞): 大阪府立淀川工科(近畿)／優秀賞(上富良野町長賞): 香川県立丸亀(四国)／敢闘賞: 北海道帯広南商業(北海道)、秋田県立横手(東北)、埼玉県立大井(関東)、千葉県立柏南(関東)、新潟県立十日町総合(中部・東海)、岐阜聖徳学園大学附属(中部・東海)、兵庫県立香寺(近畿)、島根県立松江農林(中国)、久留米市立南筑(九州・沖縄)

第14回(2007年)

優勝(北海道知事賞): 沖縄県立真和志(九州・沖縄)／準優勝(北海道新聞社賞): 広島県立庄原格致(中国)／優



秀賞：北海道旭川工業（北海道）／優秀賞：栃木県立栃木工業（関東）／優秀賞：香川県立善通寺西（四国）／敢闘賞：青森県立青森南（東北）、宮城県柴田農林（東北）、新島学園（関東）、川崎市立川崎総合科学（関東）、岐阜県立土岐商業（中部・東海）、静岡県立伊東高校城ヶ崎分校（中部・東海）、兵庫県立香寺（近畿）、近畿大学附属豊岡（近畿）、八代白百合学園（九州・沖縄）

第15回（2008年）

優勝（北海道知事賞）：新潟県立柏崎常盤（中部・東海）／準優勝（北海道新聞社賞）：大阪市立工芸（近畿）／優秀賞：北海道帯広南商業（北海道）／優秀賞：栃木県立栃木工業（関東）／優秀賞：正則（関東）／敢闘賞：秋田県立大曲（東北）、福島県立郡山東（東北）、千葉県立柏（関東）、静岡県立伊東（中部・東海）、市川（近畿）、岡山県立倉敷古城池（中国）、香川県立坂出（四国）、熊本学園大学付属（九州・沖縄）、八代白百合学園（九州・沖縄）

第16回（2009年）

優勝（北海道知事賞）：沖縄県立南部工業（九州・沖縄）／準優勝（北海道新聞社賞）：沖縄県立真和志（九州・沖縄）／優秀賞（東川町長賞）：栃木県立栃木工業（関東）／優秀賞（美瑛町長賞）：新潟県立十日町総合（中部・東海）／優秀賞（上富良野町長賞）：埼玉栄（関東）／優秀賞（東神楽町賞）：大阪信愛女学院（近畿）／優秀賞（旭川市長賞）：宮城県柴田農林（東北）／敢闘賞：北海道帯広南商業（北海道）、北海道留萌（北海道）、福島県立郡山東（東北）、千葉県立柏南（関東）、明星学園（関東）、岐阜県立東濃フロンティア（中部・東海）、静岡県立伊東高校城ヶ崎分校（中部・東海）、大阪市立工芸（近畿）、島根県立松江南（四国）、香川県立坂出商業（四国）、愛媛県立伊予農業（四国）

第17回（2010年）

優勝（北海道知事賞）：沖縄県立南部工業（九州・沖縄）／準優勝（北海道新聞社賞）：大阪府立成城（近畿）／優秀賞（東川町長賞）：宮城県柴田農林（東北）／優秀賞（美瑛町長賞）：八代白百合学園（九州・沖縄）／優秀賞（上富良野町長賞）：さいたま市立大宮北（関東）／優秀賞（東神楽町賞）：北海道帯広南商業（北海道）／優秀賞（旭川市長賞）：栃木県立栃木工業（関東）／敢闘賞：旭川実業（北海道）、盛岡中央（東北）、千葉県立柏南（関東）、正則（関東）、富山県立富山東（中部・東海）、愛知県立小牧南（中部・東海）、愛知県立津島東（中部・東海）、姫路市立飾磨（近畿）、出雲西（中国）、山口県立下松（中国）、愛媛県立北宇和（四国）

第18回（2011年）

優勝（北海道知事賞）：大阪府立成城（近畿）／準優勝（北海道新聞社賞）：沖縄県立南部工業（九州・沖縄）／優秀賞（東川町長賞）：八代白百合学園（九州・沖縄）／優秀賞（美瑛町長賞）：群馬県立大間々（関東）／優秀賞（上富良野町長賞）：正則（関東）／優秀賞（東神楽町賞）：栃木県立栃木工業（関東）／優秀賞（旭川市長賞）：香川県立坂出（四国）／敢闘賞：北海道帯広南商業（北海道）、北海道旭川工業（北海道）、盛岡中央（東北）、石巻市立女子（東北）、宮城県石巻好文館（東北）、宮城県柴田農林（東北）、明星学園（関東）、中越（中部・東海）、静岡県立伊東高校城ヶ崎分校（中部・東海）、愛知県立田口（中部・東海）、大商学園（近畿）、兵庫県立伊丹西（近畿）、山口県立下松（中国）

第19回（2012年）

優勝（北海道知事賞）：沖縄県立浦添工業（九州・沖縄）／準優勝（北海道新聞社賞）：西南学院（九州・沖縄）／優秀賞（東川町長賞）：静岡県立伊東高校城ヶ崎分校（中部・東海）／優秀賞（美瑛町長賞）：香川県立坂出（四国）／優秀賞（上富良野町長賞）：関西学院高等部（近畿）／優秀賞（東神楽町賞）：新島学園（関東）／優秀賞（旭川市長賞）：広島県立庄原格致（中国）／敢闘賞：北海道帯広南商業（北海道）、北海道札幌稻西（北海道）、宮城県石巻好文館（東北）、宮城県柴田農林（東北）、栃木県立今市工業（関東）、埼玉栄（関東）、東京都立小石川中等教育学校（関東）、新潟県立十日町総合（中部・東海）、飯田女子（中部・東海）、大阪府立生野（近畿）、兵庫県立伊丹西（近畿）

第20回（2013年）

優勝（北海道知事賞）：埼玉栄（関東）／準優勝（北海道新聞社賞）：沖縄県立浦添工業（九州・沖縄）／優秀賞（東川町長賞）：富山県立富山東（中部・東海）／優秀賞（美瑛町長賞）：大阪市立工芸（近畿）／優秀賞（上富良野町長賞）：北海道岩見沢高等養護学校（北海道）／優秀賞（東神楽町賞）：兵庫県立伊丹西（近畿）／優秀賞（旭川市長賞）：北海道帯広南商業（北海道）／敢闘賞：宮城県迫櫻（東北）、石巻市立女子（東北）、茨城県立藤代（関東）、新島学園（関東）、東京都立小石川中等教育学校（関東）、飯田女子（中部・東海）、愛知県立昭和（中部・東海）、滝川（近畿）、島根県立松江南（中国）、愛媛県立宇和（四国）、沖縄県立那覇工業（九州・沖縄）、聖和女子学院（特別記念枠）、大分東明（特別記念枠）

第21回（2014年）

優勝（北海道知事賞）：愛知県立津島東（中部・東海）／準優勝（北海道新聞社賞）：埼玉栄（関東）／優秀賞（東川

町長賞：沖縄県立浦添工業（九州・沖縄）／優秀賞（美瑛町長賞）：香川県立坂出（四国）／優秀賞（上富良野町長賞）：石巻市立女子（東北）／優秀賞（東神楽町賞）：埼玉県立芸術総合（関東）／優秀賞（旭川市長賞）：北海道江別（北海道）／**敢闘賞**：北海道名寄産業（北海道）、宮城県泉館山（東北）、群馬県立藤岡北（関東）、埼玉県立浦和第一女子（関東）、中越（中部・東海）、静岡県立伊東（中部・東海）、大阪府立成城（近畿）、帝塚山学院（近畿）、大阪市立工芸（近畿）、山口県立新南陽（中国）、沖縄県立真和志（九州・沖縄）、レジナ（オープン参加）、永仁高中・協和工商・復華高級中学（オープン参加）

第22回（2015年）

優勝（北海道知事賞）：沖縄県立浦添工業（九州・沖縄）／準優勝（北海道新聞社賞）：香川県立坂出商業（四国）／優秀賞（東川町長賞）：埼玉栄（北関東）／優秀賞（美瑛町長賞）：北海道岩見沢高等養護学校（北海道）／優秀賞（上富良野町長賞）：埼玉県立芸術総合（北関東）／優秀賞（東神楽町賞）：山口県立下松（中国）／優秀賞（旭川市長賞）：和歌山県立神島（近畿）／**敢闘賞**：北海道尚志学園（北海道）、青森県立弘前（東北）、宮城県立白石工業（東北）、千葉県立四街道（南関東）、千葉県立松戸南（南関東）、東京都立小石川中等教育学校（東京）、東亜学園（東京）、富山県立富山東（北陸信越）、光ヶ丘女子（東海）、愛知県立津島東（東海）、大阪府立生野（近畿）

第23回（2016年）

優勝（北海道知事賞）：島根県立大田（中国）／準優勝（北海道新聞社賞）：沖縄県立知念（九州・沖縄）／優秀賞（東川町長賞）：宮城県白石工業（東北）／優秀賞（美瑛町長賞）：埼玉栄（北関東）／優秀賞（上富良野町長賞）：八代白百合学園（特別招待枠）／優秀賞（東神楽町賞）：北海道帯広工業（北海道）／優秀賞（旭川市長賞）：東京都立総合芸術（東京）／**敢闘賞**：北海道科学大学（北海道）、青森県立弘前南（東北）、埼玉県立戸田翔陽（北関東）、千葉県立四街道（南関東）、神奈川県立川崎（定期制）（南関東）、早稲田大学高等学院（東京）、福井県立丹生（北陸信越）、富田（東海）、愛知県立一宮南（東海）、大阪市立工芸（近畿）、和歌山県立神島（近畿）、香川県立観音寺第一（四国）

第24回（2017年）

優勝（北海道知事賞）：和歌山県立神島（近畿）／準優勝（北海道新聞社賞）：北海道岩見沢高等養護学校（北海道）／優秀賞（東川町長賞）：沖縄県立浦添工業（九州・沖縄）／優秀賞（美瑛町長賞）：青森県立弘前南（東北）／優秀賞（上富良野町長賞）：千葉県立四街道（南関東）／優秀賞（東神楽町賞）：山口県立下松（中国）／優秀賞（旭川市長賞）：女子美術大学付属（東京）／**敢闘賞**：北海道釧路工業（北海道）、栃木県立鹿沼商工（北関東）、栃木県立足利工業（北関東）、神奈川県立横浜清陵（南関東）、東京都立大泉（東京）、新潟県立長岡農業（北陸信越）、静岡県立沼津西（東海）、愛知県立猿投農林（東海）、奈良県立王寺工業（近畿）、香川県立坂出（四国）、久留米市立久留米商業（九州・沖縄）

第25回（2018年）

優勝（北海道知事賞）：和歌山県立神島（近畿）／準優勝（北海道新聞社賞）：神奈川県立横浜清陵（南関東）／優秀賞（東川町長賞）：香川県立坂出商業（四国）／優秀賞（美瑛町長賞）：愛知県立豊橋南（東海）／優秀賞（上富良野町長賞）：埼玉県立芸術総合（北関東）／優秀賞（東神楽町賞）：沖縄県立浦添工業（九州・沖縄）／優秀賞（旭川市長賞）：東京都立総合芸術（東京）／**敢闘賞**：北海道岩見沢高等養護学校（北海道）、北海道科学大学（北海道）、宮城県農業（東北）、埼玉栄（北関東）、千葉県立小金（南関東）、富山県立富山（北陸信越）、静岡県立伊東高等学校城ヶ崎分校（東海）、愛知県立小牧南（東海）、大阪市立工芸（近畿）、島根県立大田（中国）、愛媛県立今治北高等学校大三島分校（四国）、沖縄県立真和志（九州・沖縄）

第26回（2019年）

優勝（北海道知事賞）：和歌山県立神島（近畿）／準優勝（北海道新聞社賞）：沖縄県立浦添工業（九州・沖縄）／優秀賞（東川町長賞）：北海道岩見沢高等養護学校（北海道）／優秀賞（美瑛町長賞）：出雲北陵（中国）／優秀賞（上富良野町長賞）：新島学園（北関東）／優秀賞（東神楽町賞）：帝塚山学院（近畿）／優秀賞（旭川市長賞）：栃木県立足利工業（北関東）／**敢闘賞**：宮城県農業（東北）、群馬県立富岡実業（北関東）、神奈川県立横浜清陵（南関東）、明治大学付属中野（東京）、中越（北陸信越）、豊川（東海）、愛知県立小牧南（東海）、大阪府立生野（近畿）、香川県立坂出（四国）、香川県立観音寺第一（四国）、久留米市立久留米商業（九州・沖縄）

第27回（2020年）

立木義浩賞：山口県立下松（中国）、沖縄県立浦添工業（九州・沖縄）／**鶴巻育子賞**：東邦（東海）／**公文健太郎賞**：沖縄県立知念（九州・沖縄）／**中西敏貴賞**：群馬県立富岡実業（北関東）／**小高美穂賞**：仙台市立仙台工業（東北）／**野勢英樹賞**：北海道旭川北（北海道）／**本戦出場賞（11校）**：宮城県農業（東北）、埼玉栄（北関東）、神奈川県立横浜清陵（南関東）、東京都立両国（東京）、福井県立丹生（北陸信越）、関市立関商工（東海）、大阪府立生野（近畿）、和歌山県立神島（近畿）、島根県立大田（中国）、愛媛県立今治北高等学校大三島分校（四国）、沖縄県立沖縄工業（九州・沖縄）

第28回（2021年）

優勝（北海道知事賞）：沖縄県立沖縄工業（九州・沖縄）／準優勝（北海道新聞社賞）：和歌山県立神島（近畿）／優秀賞（東川町長賞）：香川県立坂出商業（四国）／優秀賞（美瑛町長賞）：樹徳（北関東）／優秀賞（上富良野町長賞）：北海道岩見沢高等養護学校（北海道）／優秀賞（東神楽町賞）：出雲北陵（中国）／優秀賞（旭川市長賞）：帝塚山学院（近畿）／敢闘賞：青森県立弘前南（東北）、群馬県立富岡実業（北関東）、翔凜（南関東）、神奈川県立横浜清陵（南関東）、東京都立総合芸術（東京）、富山県立富山中部（北陸信越）、名古屋経済大学高蔵（東海）、東邦（東海）、山口県立防府（中国）、佐賀県立致遠館（九州・沖縄）、八代白百合学園（九州・沖縄）

第29回（2022年）

優勝（北海道知事賞）：大阪府立生野（近畿）／準優勝（北海道新聞社賞）：沖縄県立沖縄工業（九州・沖縄）／優秀賞（東川町長賞）：富山県立富山中部（北陸信越）／優秀賞（美瑛町長賞）：北海道岩見沢東（北海道）／優秀賞（上富良野町長賞）：東京都立八丈（東京）／優秀賞（東神楽町賞）：愛知県立小牧南（東海）／優秀賞（旭川市長賞）：沖縄県立嘉手納（九州・沖縄）／敢闘賞：北海道札幌稻雲（北海道）、仙台市立仙台工業（東北）、埼玉栄（北関東）、埼玉県立戸田翔陽（北関東）、翔凜（南関東）、神奈川県立逗葉（南関東）、東京都立総合芸術（東京）、豊川（東海）、大阪府立工芸（近畿）、山口県立下松（中国）、済美（四国）

第30回（2023年）

優勝（北海道知事賞）：大阪府立生野（近畿）／準優勝（北海道新聞社賞）：城北埼玉（北関東）／優秀賞（東川町長賞）：翔凜（南関東）／優秀賞（美瑛町長賞）：東京都立総合芸術（東京）／優秀賞（上富良野町長賞）：富山県立富山東（北陸信越）／優秀賞（東神楽町賞）：八代白百合学園（九州・沖縄）／優秀賞（旭川市長賞）：沖縄県立浦添工業（九州・沖縄）／敢闘賞：白樺学園（北海道）、青森県立弘前南（東北）、栃木県立栃木工業（北関東）、神奈川県立横浜清陵（南関東）、神奈川県立逗子葉山（南関東）、トキワ松学園（東京）、東京都立八丈（東京）、静岡聖光学院（東海）、愛知県立小牧南（東海）、帝塚山学院（近畿）、出雲北陵（中国）、愛媛県立今治北高等学校大三島分校（四国）

第31回（2024年）

優勝（北海道知事賞）：宮城県白石工業（東北）／準優勝（北海道新聞社賞）：沖縄県立真和志（九州・沖縄）／優秀賞（東川町長賞）：和歌山県立神島（近畿）／優秀賞（美瑛町長賞）：茨城県立笠間（北関東）／優秀賞（上富良野町長賞）：東京都立武蔵村山（東京）／優秀賞（東神楽町賞）：愛知県立緑丘（東海）／優秀賞（旭川市長賞）：東京都立八丈（東京）／敢闘賞：北海道幕別清陵（北海道）、群馬県立富岡実業（北関東）、神奈川県立逗子葉山（南関東）、千葉県立幕張総合（南関東）、中越（北陸信越）、静岡聖光学院（東海）、愛知県立小牧南（東海）、帝塚山学院（近畿）、山口県立南陽工業（中国）、島根県立平田（中国）、徳島県立徳島科学技術（四国）

【歴代審査員】

審査委員長（写真家）：立木義浩（第1回～第30回）

代表審査委員：野村恵子（第31回～）

審査委員（写真家）：橋口譲二、水越武、伊東剛、竹内敏信、竹田津実、大石芳野、榎並悦子、米美知子、長倉洋海、鶴巻育子、公文健太郎、中西敏貴、須藤絢乃、鶴川真由子、浅田政志、村上悠太、野村恵子、大森克己
 審査委員：山崎幸雄（『アサヒカメラ』編集長）、三留秀次（『月刊カメラマン』編集長）、阿部庄之助（『CAPA』総編集長）、高田準（『CAPA』編集長（本戦最終日））、吉岡達夫（『コマーシャル・フォト』『別冊コマーシャル・フォト』編集長）、梶原高男（『日本カメラ』編集長）、市川正昭（キヤノン販売（株）カメラ販売事業部CR部長）、飛田信彦（北海道新聞社編集委員）、曾根陽一（『月刊カメラマン』編集長特派・写真家）、平木収（『アサヒカメラ』編集長特派・写真評論家）、落合憲弘（『月刊カメラマン』編集長特派・写真記者）、広瀬博（『アサヒカメラ』編集長）、日比野敏一（『月刊カメラマン』編集長）、谷口勲夫（北海道新聞社写真部長）、須藤茂樹（学研雑誌第三編集部カメラ編集室長、学研『CAPA』総編集長）、吉川八百美（玄光社顧問）、田村民雄（キヤノン販売（株）カメラCR部副部長、フォトハウス 部副部長）、河村民子（『コマーシャル・フォト』編集長）、河野和典（『日本カメラ』編集長）、三浦寿美男（北海道新聞社写真部長）、川名廣義（キヤノン販売（株）フォトハウス部部長、フォトカルチャー推進部部長、キヤノン MJ（株）カスタマーコミュニケーション本部主席）、高橋雅博（北海道新聞社写真部長）、松原国臣（北海道新聞社写真部長、編集委員）、石橋修（北海道新聞社）、橋本年功（北海道新聞社）、奥田明久（『アサヒカメラ』編集長）、山崎隆志（北海道新聞社）、坂本直樹（『月刊カメラマン』編集長）、川人正善（北海道新聞社写真部長）、石田立雄（『CAPA』編集長）、岩井直樹（北海道新聞社写真部長、編集局解説委員）、川上義哉（『デジタルカメラマガジン』編集長）、前田利昭（『日本カメラ』編集長）、藤森邦晃（『フォトコン』編集長）、藤井貴城（『フォトテクニックデジタル』編集長）、佐々木広人（『アサヒカメラ』編集長）、野勢英樹（北海道新聞社写真部次長）、小高美穂（フォトキュレーター）、西村昌晃（北海道新聞社編集局写真映像部長）

※肩書きは参加当時。掲載は参加年順。

高校生国際交流写真フェスティバル(ユースフェス)選抜校

2015~2024

第1回（2015年）

選抜校：北京市回民学校（中国）、ソッジョン女子高等学校（韓国）、稻江高級護理家事職業学校（台湾）、プリンスロイヤルカレッジ学校（タイ）、タン・ロンチーム（ベトナム）、タシケント・フォトスラットラル・ウイ・フォトマクタビ（ウズベキスタン）、グローバルジャヤ学校（インドネシア）、キャンベラ高校（オーストラリア）、キャンモア公立高校（カナダ）、ルーエナ高校（ラトビア）、北海道帯広工業高校・北海道北広島高校（北海道）、茨城県立土浦第一高校（茨城県）

「写真の町」東川町賞（金賞）学校の部：ルーエナ高校（ラトビア）

第2回（2016年）

選抜校：北京市第八十高校（中国）、ソッジョン女子高等学校（韓国）、台北市立中山女子高級中学（台湾）、モンフォート高校（タイ）、サイゴンチーム（ベトナム）、国立デザイン専門学校（ウズベキスタン）、グローバルジャヤ学校（インドネシア）、キャンベラ高校（オーストラリア）、キャンモア公立高校（カナダ）、ルーエナ高校（ラトビア）、ブロンクス・ドキュメンタリーセンター（アメリカ）、北海道恵庭南高校・北海道帯広南商業高校（北海道）、滋賀県立石山高等学校（滋賀県）

「写真の町」東川町賞（金賞）学校の部：サイゴンチーム（ベトナム）

第3回（2017年）

選抜校：北京市通州区潞河高校（中国）、ヨンウォル高校（韓国）、国立台湾師範大学附属高校（台湾）、ランシー・ウイッタヤー・スクール（タイ）、フースアンチーム（ベトナム）、ウズベキスタン国立世界言語大学付属第2高校（ウズベキスタン）、カルティニ1高校（インドネシア）、キャンベラ・ホーカー・カレッジ（オーストラリア）、キャンモア公立高校（カナダ）、ルーエナ高校（ラトビア）、ブロンクス・ドキュメンタリーセンター（アメリカ）、ヤンゴン州立芸術高校（ミャンマー）、スリハルタマス高校（マレーシア）、北海道東川高校・北海道科学大学高校（北海道）、広島県立尾道商業高校（広島県）

「写真の町」東川町賞（金賞）学校の部：ウズベキスタン国立世界言語大学付属第2高校（ウズベキスタン）

第4回（2018年）

選抜校：北京大学附属高校（中国）、ヨンウォル高校（韓国）、台北市立松山高級商業家事職業学校（台湾）、サトリー・ウイッタヤー2（タイ）、ハイ・イエンチーム（ベトナム）、タシケント高校〈インターナショナルハウス〉（ウズベキスタン）、インフォルマティカ・フィトラ・インサニ（インドネシア）、キャンベラ高校（オーストラリア）、キャンモア公立高校（カナダ）、ルーエナ高校（ラトビア）、ブロンクス・コラボレイティブ高校（アメリカ）、ヤンゴン州立芸術高校（ミャンマー）、コンベント・ブキット・ナナス高校（マレーシア）、アングロ・チャイニーズ学校（シンガポール）、カンガサラ高校（フィンランド）、マジュロ・コーポレイティブ学校（マーシャル諸島）、ラボラトリ・ハイスクール・オブ・ヤングインベンターズ（モンゴル）、ユジノサハリンスク高校（ロシア）、北海道東川高校・北海道大麻高校（北海道）、宮城県白石工業高校（宮城県）

「写真の町」東川町賞（金賞）学校の部：宮城県白石工業高校

第5回（2019年）

選抜校：北京第十一高校（中国）、ヨンウォル高校（韓国）、台北市立松山高級工農職業学校（台湾）、ターソーンヤーン・ウイッタヤーコム校（タイ）、ホイアンチーム（ベトナム）、ウズベキスタン美術アカデミーデザイン学校（ウズベキスタン）、カラサン1高校（インドネシア）、ナマージスクール（オーストラリア）、キャンモア公立高校（カナダ）、ルーエナ高校（ラトビア）、NYCソルト（アメリカ）、トンテー国立高校（ミャンマー）、ヴィクトリア・インスティテューション（マレーシア）、タマセク・ポリテクニック（シンガポール）、カンガサラ高校（フィンランド）、マジュロ・コーポレイティブ学校（マーシャル諸島）、ニュービギナーモンゴル高等学校（モンゴル）、青年センター（ロシア）、ブーシェ・ド・ペルテ学校（フランス）、サンティバーブ高校（ラオス）、ルクセンブルクエコールヨーロピアン1（ルクセンブルク）、北海道東川高校・札幌創成高等学校（北海道）、飯田女子高等学校（長野県）

「写真の町」東川町賞（金賞）学校の部：ニュービギナーモンゴル高等学校（モンゴル）

**第6回（2020年）**

選抜校：北京市通州区潞河高校（中国）、啟英高校（台湾）、ポッププラーウィッタヤーコム学校（タイ）、チームベンチエ（ベトナム）、第1ムハマディア・プランパン高等学校（インドネシア）、リネハム高校（オーストラリア）、ルーエナ高校（ラトビア）、ブロンクス・ドキュメンタリーセンター（アメリカ）、トンテー国立高校（ミャンマー）、カンガサラ高校（フィンランド）、オロンログ アカデミー高校（モンゴル）、アニワ市立第一学校（ロシア）、ジェラール・ド・ネルヴァル高校（フランス）、ホムサヴァン学校（ラオス）、ルクセンブルクエコールヨーロピアン1（ルクセンブルク）、チームトリコロールボヤカ（コロンビア）、北海道東川高校（北海道）、佐賀県立唐津東高等学校（佐賀県）

審査員チョイス賞：トンテー国立高校（ミャンマー）

第7回（2021年）

選抜校：北京市建華実験学校（中国）、マチャ高等学校（韓国）、台北市立士林高級商業専門学校（台湾）、ケーンナコン・ウィッターヤーライ校（タイ）、ラム・ビエンチーム（ベトナム）、第6学校（ウズベキスタン）、インドネシアコタキナバル学校（インドネシア）、ワニアッサ高校（オーストラリア）、キャンモア公立高校（カナダ）、ルーエナ高校（ラトビア）、ヒルグローブ中・高等学校（シンガポール）、カンガサラ高校（フィンランド）、ダルaine チョクチョロボル（モンゴル）、アニワ市立アガニキー村第三学校（ロシア）、パンポル・ケラウル高校（フランス）、ヴィエンチャン中・高等学校（ラオス）、ルクセンブルクエコールヨーロピアン1（ルクセンブルク）、トゥンハ アンディーオ高校（コロンビア）、北海道東川高校（北海道）、高知県立中村高等学校（高知県）、第6回フェスティバル賞受賞校 北京市通州区潞河高校（中国）

審査員チョイス賞：ダルaine チョクチョロボル（モンゴル）

第8回（2023年）

選抜校：韓国消防マイスター高校（韓国）、台北市立中山女子高級中学（台湾）、ポッププラーウィッタヤーコム学校（タイ）、BAHAN.IMAGES株式会社（ベトナム）、デザイン専門学校（ウズベキスタン）、第1パンパンリプロ公立高校（インドネシア）、メルローズ高校（オーストラリア）、キャンモア公立高校（カナダ）、ルーエナ第2高校（ラトビア）、ブロンクス・ドキュメンタリーセンター（アメリカ）、トンテー国立高校（ミャンマー）、アングロ・チャイニーズ学校（シンガポール）、カンガサラ高校（フィンランド）、ラボラトリ・ハイスクール・オブ・ヤングインベンターズ（モンゴル）、ジャン・マセ高校（フランス）、ヴィエンチャン第二高校（ラオス）、ギャルソン中高等学校（ルクセンブルク）、ジェネサノ商業技術教育機関（コロンビア）、東京都立久留米西高校（東京）、北海道東川高校（北海道）

「写真の町」東川町賞（金賞）団体の部：ジャン・マセ高校（フランス）

第9回（2024年）

選抜校：福建省南安第一中学（中国）、ヨンウォル高校（韓国）、台北市立中山女子高級中学（台湾）、ラチャウィニット・パンケーオ学校（タイ）、BAHAN.IMAGES株式会社（ベトナム）、国立芸術専門寄宿学校（ウズベキスタン）、AAGアディスチブト航空専門学校（インドネシア）、ナマージスクール（オーストラリア）、キャンモア公立高校（カナダ）、ルーエナ高校（ラトビア）、ブロンクス・ドキュメンタリーセンター（アメリカ）、トンテー国立高校（ミャンマー）、カンガサラ高校（フィンランド）、オユニトルガスクール（モンゴル）、ゴブランCCIパリイルドフランス専門学校（フランス）、シャイアブリー中等教育学校（ラオス）、セント・アンネ私立高校（ルクセンブルク）、ラス・カニヤス教育機関（コロンビア）、セント・アンドリュース・カレッジ（アイルランド）、鹿児島県立伊集院高等学校（鹿児島）、北海道東川高校（北海道）

「写真の町」東川町賞（金賞）団体の部：ゴブランCCIパリイルドフランス専門学校（フランス）

※第1回～5回の日本の選抜校は「北海道内枠」から2校、「全国枠」から1校、6回目以降は「高文連推薦枠」として全国から1校、「地元枠」として東川高校が選ばれています。

東川町「写真の町」40周年誌

ちいさな町の、おおきな歩み

TOWN of PHOTOGRAPHY ANNIVERSARY BOOK

2025年6月1日発行

発行 写真文化首都 北海道「写真の町」東川町
〒071-1492 北海道上川郡東川町東町1丁目16-1

企画・編集・執筆 畠田大詩

編集協力 安藤菜穂子

デザイン 新藤岳史

イラスト 田渕正敏

校正 山田真弓

取材協力 写真文化首都 北海道「写真の町」東川町
東川町写真の町実行委員会

印刷・製本 株式会社シナノ

Created in HIGASHIKAWA
©Photo town HIGASHIKAWA All Rights Reserved.



